

2024年

文芸ふじさわ

第58集



文芸ふじさわ

第58集

藤沢市教育委員会（公財）藤沢市みらい創造財団

Imagination & Creation Design



グラフィックデザイン
イラストレーション
キャラクターデザイン
サイン広告(看板)
セールスプロモーション
映像制作
WEBデザイン



お気軽にご相談ください

〒251-0002 神奈川県藤沢市大鋸1-9-3
Phone: 0466-25-4019(代表)
E-mail: share@art-inamoto.co.jp(代表)

SEKIMIZU SPORTS

大会の盾、トロフィー及び記念品の
ご注文を承っております!

営業時間 10:30am ~ 8:00pm

月曜定休

住所: 藤沢市鶴沼石上1-3-1

TEL 0466-26-3355

FAX 0466-26-3530

表紙のことば

江ノ島弁財天鳥居

初めて江ノ島を見たのは中学2年の修学旅行の時だった。

当時、橋は木製で古ぼけて見えた。歩くとグジャ、貝を踏みつけていたのだ。浅蜷、江ノ島の海でたくさん貝が獲れたコトが分かりました。

十年後、藤沢に住むなどとは、思い至る由もありませんでした。

藤沢に居を構えて、56年。幾度となくこの江ノ島へ来て鳥居の下を潜りました。

昨年秋スケッチに参りました際、しみじみこの鳥居を見上げ、手で触ってみると何と冷たい、青銅の鑄物だったのです。

今回は、この鳥居を取り上げてみました。

=由緒書より=

江ノ島弁財天参拝の玄関口となる鳥居です。

古くは木製であったが1821年青銅製で再建された。今から202年前、江戸時代中頃の事ですね。鳥居の柱には再建に尽力した多くの人の名が刻まれており、信仰の篤さを物語っています。只、海側の面は潮風に晒されてよく読めません。

正面の額は「江ノ島大明神」と書かれていますが、特徴的な筆跡は弁財天のお使いである蛇をかたどっています。我が国にモンゴル軍が襲来した戦い(文永の役)で敵側が退散した事への神思感謝として第91代後宇多天皇が奉納したとされる勅額を写したものです。

1997年、藤沢市指定文化財に登録。

皆さんも江ノ島に行かれた際は、是非この鳥居に触ってみてください。歴史を感じますよ。

絵と文 蓮池高夫

事務用品・書籍・教科書・紙製品
(有)豊元書店

〒251-0052

藤沢市藤沢1056(外商部)

藤沢店 TEL 0466-26-2311

外商部 TEL 0466-26-5111

FAX 0466-27-1550

E-mail info@e-toyomoto.com

URL http://www.e-toyomoto.com

波俳句会

個性の開花・十七音を自分史に
主宰 山田貴世

誌代 半年 6000円
一年 12000円

発行所

〒251-0875

藤沢市本藤沢1-8-7 山田方

TEL/FAX 0466-82-6173



ホームページは
「波俳句会」で検索か
QRコードで

有限会社

ユザブ文具

〒252-0812

藤沢市西俣野2657

TEL:0466-81-0088 FAX:0466-81-0052

営業時間: 月~金(10:00~18:00)

休業日: 土日・祝日・定休日

Email: yuzabun@cello.ocn.ne.jp

文芸ふじさわ

第58集

目次

表紙のことば

「文芸ふじさわ第58集によせて」

俳句	7
短歌	55
川柳	67
五行歌	85
現代詩	97
随筆	107
編集後記	158
サークル紹介	164

「文芸ふじさわ第58集によせて」

藤沢市教育委員会

教育長 岩本 将宏

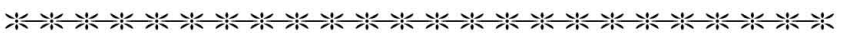
「文芸ふじさわ第58集」が発行されますことをお祝い申し上げますとともに、長きにわたり、文芸を愛されるみなさまとともに、発行を継続してこられたことに心から敬意を表します。「文芸ふじさわ」は、市民のみなさまが、「俳句」「短歌」「川柳」「五行歌」「現代詩」「随筆」の創作活動を通して、自分の思いを表現し、その作品を多くのみなさまに披露し、その作品をお互いに鑑賞しあう場となっています。

三年以上にわたった新型コロナウイルス感染症を乗り越え、今年こそ平穏なよい年になりますように願った矢先、元日に「令和6年能登半島地震」が起こってしまいました。また、毎年のように起こる水害など、自然災害が年々多くなっている印象です。今年一年が、安全・安心な一年になるよう、あらためて祈念したいと思います。能登半島地震で被災されたみなさまには、一日も早い復興を祈るばかりです。

さて、文芸作品の執筆活動をされている方にとって、ご自身の作品を投稿する場が身近にあることは、とても幸せなことだと思います。他の人に自分の作品を読んでいただけけることは励みになりますし、他の人の作品に触れることで、刺激を受け、自らの作品作りの幅を広げることが出来ます。同じ趣味を持つ人たちが、「文芸ふじさわ」を通して切磋琢磨しながら成長しあうことは、とても素晴らしいことだと思います。

これまでの作品を拝見させていただきますと、幼いころの思い出や、日々の暮らしの中で感じた細やかな心の動き、人や自然とのふれあいの中で感動したことなどを感性豊かにとらえられ、どの作品も素晴らしく、心を動かされるものばかりでした。ぜひ、一人でも多くの方々に読んでいただきたいと感じました。

「文芸ふじさわ」が長年にわたり発行を続けてこられたのは、愛好者のみなさまが熱心に作品の投稿を続けてこられたことと、編集委員のみなさまの不断の努力によるものと思っております。作品の投稿を通して広がるみなさまの輪が、世代を超えて大きく広がり、ますます愛される「文芸ふじさわ」となることを心から願っております。



俳
句

青木敏行

(みずず会・森の座)

嬰にぎる母の小指や春の風
龍天に登る江ノ島大灯台
新小屋の子山羊跳ねる夏始
大本營地下壕跡の花木権
塩引を吊る三和土にも神在す

阿部峰子

(一葦)

秋灯下定價二圓の季寄せ引く
峠越ゆあさぎまだらに秋の風
連れそひし夫婦の呼吸五段稲架
小さき舟ふせて岬の冬仕度
舳みな初日に向ける志雄の浦

安保淳子

(天為湘南)

袴取る指先黒き土筆和
麦の風いつまた吹かんウクライナ
島をぬひ進む客船白夜光
入院の母に付き添ふ長き夜
形良き団栗有りて弥次郎兵衛

あや子

(みちくさ)

短冊に一句したため筆始
桜咲く侍ジャパン世界一
岩蔭の浅瀬に生ゆる沢山葵
観音の眼ざし遙か鯛雲
車窓より宵の信州星月夜

生田 暁美

赤々と山染まる頃閑古鳥
あら草にぼつと顔出す狐花
鎌倉の人混みよそに金木犀
秋刀魚焼く戦ばかりの地球かな
秋高しバツハの響く西洋館

池野 隆

ポールペンノックの音の冴ゆる朝
晩学の単語帳買ふ春の夢
なんとなく書店に向ふ春嬉し
思い出せこの若夏の肩車
忘るるな摩文仁の夏の鉄の雨

石垣 みち代

初日記先づ快晴と記しけり
諍ひのあとの淋しさ春炬燵
囀りや特等席の丸太椅子
花曇何でも褒める九十才
柿若葉阿吽の呼吸遠くなり

石崎 玄舟

産土の千年杉の淑気かな
筍を巻きし地方紙読みふける
草取りの首手拭に酒屋の名
餌を終へてすぐに砂食む金魚かな
家計図に加筆の年期文化の日

伊藤 成子

咳の児の背さする三晩息静か
春めくや仁王は見得の手を睨む
寺隅の椅子の硬さや日向ぼこ
小言あと母の涙や半夏生
給料日ガラスケースの秋刀魚かな

伊藤 美也子

寒林や一本の道貫けり
春深し消炭色に暮るるなり
谷戸小谷戸春夕焼のすみわたる
新樹光愛する力残りをり
雲の峰ざぶざぶ目玉洗ひけり

伊藤 就 晤

筍を土間に放りて朝餉かな
若竹や異国の力士腰高し
地球儀の傾く理由夏休
朝顔の咲き分けにけり影日向
蟪蛄の無人販売招きをり

稲垣 正晴

サンダルや素足に触れる朝の草
せり出して冷やし中華の絵看板
懸案にやつと向き合ふ梅雨籠り
梵字浮く青葉時雨の不動尊
蛸や何もせぬまま日が暮れる

今井 美恵子

(波)

わが街も銀座のありて年新た
雛の前二人つきりの宴かな
駆けてきし夏少年に似て眩し
朝顔のそば砂浴びの雀かな
江ノ電を和田塚で降り夕笹子

居山 勝

(天為湘南)

診察室のカーテン越の初笑
みどりごのにぎにぎの手や春つかむ
初ひばり夢の音するランドセル
炎昼や沈黙続く自動ドア
桐一葉終活帳の一行目

岩谷 明子

(冬すみれ)

ムーティにまた会え上野の夕桜
気がつけばピアス片耳春寒し
新樹光添えてテラスのランチかな
里山は栗花落となりて白き花
「深夜便」聞きつ窓辺の雪明り

岩見 好晃

(くら)

木道の蒼き淵辺に半夏生
八月や崩れしままの墓ありぬ
落ち蝉や掃き寄せられて回向院
イージスの高きレーダー秋の晴れ
焼き締める備前窯裏曼珠沙華

植田 裕子

(なつ)

崖下に虫袋の細き径
木道に小さな帽子未草
雨ほつほつ長屋門への四葩濃し
昼寝より覚めたる幼吾に笑み
母逝きし後の年月草の絮

う さ お

(はこべ)

浜夕焼砂紋に残る日の疲れ
名月やそつと汲み取る絹豆腐
蛞蝓に塩ふり懺悔懺悔かな
露草の庭よ潮風満ちてくる
空蝉のしがみ付きたる原爆忌

江口 文子

(天為湘南)

花冷の椅子の硬さやツインバス
すずらんやキーホルダーの鈴の音
フルートに和したる窓の若葉風
サングラス少しずらして街を見る
惜しみなく今日のいのちの揚花火

遠藤 ますみ

(天為湘南)

新刊の帯光出す四月かな
母の日や舌にほどよき和三盆
子午線の通る海峡大南風
アイロンの滑り軽やか夏衣
夕顔や白き風舞ふ京町家

大内 絵 美

(たけのこ)
緑蔭を奏づるラヴェルの指欲しき
水無月の蝶はいづこかシヨパン弾く
片陰に留まるは親ばかりかな
喧嘩してアイス最中を真つ二つ
蝉時雨キャッチボールの母息子

大内 洋 子

(天為湘南)
天国へ緊急メール桜咲く
富士の端に夕陽炸裂卵波立つ
螢の夜川のゆらぎに星の海
星合や古き社の梶老樹
また一つ木の実降る音山の径

大久保 啓 子

(たけのこ)
我が母郷菜の花畑と青い海
夏の雲飽かず眺めて独りの日
雲の峰もう少しだけ頑張らう
流れ星夫の心の平らかに
盆唄の途切れ途切れにひとりの夜

大庭 浩 子

(天為湘南)
初電車膝おくりしてもう一人
梅真白子の素直さをほめてやり
五月闇半人半獣伝説画
梅雨晴や杖のあふるる集会所
秋彼岸墓のありかも知らされず

大庭 葉 子

(天為湘南)
噴水のくづれうかびし親子連
あぢさゐの相寄り藍をもりにけり
瓢箪の鬼のつかめるくびれかな
藤棚の会釈をかはし名を知らず
かろがろと鉄塔かかげ山笑ふ

大 山 美和子

(天為湘南)
夕日差す広き静けさ雛の部屋
どこまでも自由奔放花吹雪
鬼ごっこ駆け出す子らよ春うらら
青嵐中学校の体育祭
夕焼けや補助輪はづし一周す

大 平 雅 芳

(たけのこ)
臨海の梅雨の深さへ鶴見線
コンビナート丸ごと梅雨の中にあり
泡盛や海ゆつくりと暮るる島
成田発夜間飛行は白夜行き
八月六日の太陽沈む太田川

岡 本 泉

(鷹)
放送のポリウム増せり運動会
逝きし日の短かき言葉鉢の菊
柿熟るる夕べは風のつりけり
源流の幽かな音や藪柑子
故里のはらからやさし野紺菊

小田 徹 夫

(天為湘南)
江戸つ子の氣つぶでかつぐ神輿かな
雨だれの石穿つ寺花菖蒲
人の世の理不尽に咲く蓮の花
八月や父に百寿の祝ひ膳
生き尽くしたただ生き尽くし蟬時雨

男 波 弘 志

(天為湘南)
啐啄の刻満ちてきし抱卵期
日傘して方寸の影足元に
黒板の文字すぐ消され青嵐
青桐や夕餉のあともある日暮れ
人ごゑをてのひらがこひして晩夏

折 原 千 恵 子

(天為湘南)
元旦や会えない友と長電話
ゴーヤカーテン種まき描く夏立ちぬ
ぼつくりの鈴音うれし七五三
のぞき込む奈落の底から秋の声
夜神楽のわらい膨らみ渦となり

加 藤 静 子

(波・はこべ)
白芙蓉術後の友の胸うすき
病む友の夜の長さを嘆きをり
約束の蛭見待たず友逝けり
亡き友が秋の風鈴鳴らしけり
山しやくやく咲いて寂しさ募りけり

金 井 京 子

(天為湘南)
西向きのポストに赤き葉鶏頭
無花果をもぐ手に伝ふ白き乳
枝重き鈴なりの実や鶉高音
投網打つ魚跳ね躍り川に立つ
里山の見上げる空の星月夜

釜 本 俊 男

(天為湘南)
薨打つ五月雨の音また楽し
浴衣着をどつと吐き出す小駅かな
異常気象金木犀の香り立つ
風涼しコスモス笑顔平和乞ふ
秋の風熱中症が嘘のやう

金 子 真 弓

(天為湘南)
梅が香をまとひ足湯に浸かりけり
柔らかな富士の稜線春霞
老夫婦手提げ袋に菖蒲の葉
夏海波間に鷗の見え隠れ
鈴激し跳人の武者絵と競ふごと

神 谷 章 夫

(天為湘南)
軽トラがあつて植田の景となる
お不動の片目はつぶら葛桜
油照海見えぬまま海の駅
妻と子の同じ足音秋思ふと
遊行忌や案山子のやうに何もせず

亀倉美知子

河村笑

(波)

豊かなるふるさとの井戸冷素麵
子供の日声の戻らぬニュータウン
山車引くや大音声の「大まがり」
ふるさとの林檎もみ殻にもかをり
初富士へ向ひておのれ無となれり

(鷹)

ほんぼりの火点し頃や花の雨
熱の子の寝息落ちつく緑雨かな
午後からは荒れ模様らし白牡丹
連弾の姉のおさげや緑さす
夕暮の祇園囃子の渦に入る

川口和子

河村青灯

(天為湘南)

春立つや楷書きりりと師の便り
花冷や生薬にほふ古土瓶
白牡丹終の一片残りをり
空缶の漂ふ運河薄暑光
小舟ゆく海を遥かに青蜜柑

(鷹)

短夜のながき夢なり覚めて愛し
地芝居の明りに逸る下駄の音
声囁らし渡御暁の海に入る
ふたたびのひとりを生くるパナマ帽
冬霧に鉄路の記憶レンゲワ橋

川本みつえ

久保田恵子

(木犀会)

嫁ぐ日やこれが最後と雛飾る
夏山やしぶき散らしてダム放流
五月鯉筑波の風を全身に
冬空に融けて天城の桐の花
ぐい呑みに月光映し酒を酌む

(鷹)

螢待つ茜に染まる森の中
白南風や苞の月桃香の強き
青葉山寺は塵芥燻らしむ
豆むしろ広げし母の手のごつく
万緑や町を眼下に石舞台

草柳節子

黒川堇

(天為湘南)

今朝もまた薔薇の蕾を数へをり
短冊に墨の香の立つ文化の日
古民家の坂を上れば杏の実
秋風を友に散歩の足のばし
木の葉雨をどる姿に見とれをり

(天為湘南)

花合歓の葉の閉づる頃母の声
豪州の薄暑の夕べ鴨嘴
紅茶葉の浮きては沈む春うらら
初参り桜の香の満つる地藏堂
羽子突や本気の父に勝気の子

keitō

小高秀則

(天為湘南)

(xlv)

夜の更けてそうつとしまふ桜貝
うそつきとにらむあなたと蛇苺
あぢさゐの色づくあひだ恋をする
ストレスは子にもいろいろ椿の実
湯豆腐やつかみ難しはひところ

一行に足る七十路の夏見舞
をちこちに風の足跡青田面
「魅惑のワルツ」流るる午後や檸檬切る
自由自在人無き駅の秋茜
野になびく風の気ままに吾亦紅

小関 こうこ

小林 和子

(天為湘南)

(一葦)

醒めてなほ胸に悶へり春の夢
父母の墓鮎の瀬音を聞きをらん
メロデーの奏でる道路青葉風
さりげなく十葉活けて漢方医
足場解く声かけ合うて夏の暮

入り組みし路線図たどる小春かな
花ミモザケーキシヨップのテラス席
農小屋のぼつんと置かれ日永かな
大いちやう実生若葉に囲まるる
山蛭の立ち上がりたる黒き影

小林 美知子

小堀 公美子

(天為湘南)

(鶺鴒かぼちゃ)

梅の幹龍のうろこをまとひけり
子どもらが笹舟競ふ春の川
雲裂けて日射しのぞける夏来たる
梅雨晴れの空切り裂きて飛ぶ燕
孤り座して本読む夜長深海魚

独眼の達磨を焼べるとんどかな
もう聞けぬ父の我儘春の雪
アトリエに削る楠の香聖五月
せせらぎの微かなる音花茗荷
過ぎし日の遙か遊行の忌の彼方

小林 律子

小松原 キイ子

(天為湘南)

(一葦)

落柿舎のしぶき茶を飲み春寒し
江の島の茅の輪くぐりや海光る
漆黒の空に揺らめく竿燈かな
じりじりと真昼の喧騒蟬の声
実る穂をなぎ倒したる野分かな

ひとときの四つ葉探しや春惜しむ
乾拭きの太き柱や涼新た
萩の花まだ咲きぎれぬ風の先
二度咲きの匂ひ新たに金木犀
色を変へあしたへ繋ぐ毛糸編む

小山 美穂

(株)クラブハウスインユー

青蛙指に乗せたし遊びたし
桐一葉落つるほどなる小さき夫
ウエディングネズの妻にとなりにけり
墓参り病で祈る吾に文あり
孟蘭盆会供えしとうろう吾一家

小山 ヤヨイ

(あら)

門に待つ母のエプロン月に映え
星月夜君をハグした窓にひとり
待合室同じマフラー老親子
メデイチ家の空気そのまま古暦
冬木に実丸く大きな二羽の鳩

紺谷 健一朗

(さら)

遠き地に子は職を得し雲の峰
更けてより踊る輪に入る母の影
信金の若手総出や盆踊り
雲が墓標父つぶやけり終戦日
青墨の見舞ひの筆や今朝の秋

近藤 博美

(天為湘南)

一瞬の翡翠青き線となる
ふるさとの言葉聞き入る夏の旅
秋の日の回転木馬時駆けり
若き日の夢の残りを摘む花野
明けの星次の舞台へ旅途中

齊藤 久美子

(天為湘南)

老木の折れし枝にも八重桜
花火師の夢と情熱夜の空
月眺むいにしえ人に想いはせ
野分け来て漁船連なる港かな
芒原色なし風になびきけり

齋藤 まり江

(波)

柔らかき光の中の白椿
新緑の風にまどろむ午後三時
爽やかや一人夕べの海の風
秋澄めるヒマラヤ杉と白き雲
着ぶくれか鏡に斜に立つてみる

齊藤 義昭

(天為湘南)

空家にも白梅咲けり堂堂と
水かさを増して勢い春の川
月下美人夜更まで待ち酒二合
風抜けの床で大の字夏合宿
風渡りさざ波となる稲穂かな

坂本 きみよ

(波)

老耄は笑いとはして年新た
水の面の同心円や残り鴨
飛び入りの手練れ男や踊り笠
真四角に生きて手酌の冷奴
歳晚や寺へ寸志の竹箒

さとう 桐子

(天為湘南)

絵らふそく消えゆく花の朧かな
つらゆきのかな文字散らす桜まじ
散る花を寄せて走り根やはらかき
夏のゆく原風景を拾ひつつ
和菓子屋の日除を残し店じまひ

佐藤 美津子

(天為湘南)

風薫る庭で一服旅ごころ
夕焼け空仕事帰りのプレゼント
囲碁将棋力五角の野分かな
故郷の大地を覆ふ稲穂かな
子規庵の庭にさし込む月あかり

佐野 恋蔵

(天為)

角たたぬ話し上手や冷奴
片蔭を手繰り手繰りて陸奥へ
さんざ踊り地層一枚捲れたる
炎天の鉄路まつすぐ草田男忌
姥捨や昨日遠野の青田波

鮫 島 美和子

(天為湘南)

小綬鶏の覗く旅館の朝餉かな
春一番止みて深夜の救急車
パレットに桜蕊ふり天守閣
水張田や鷺のつそりとパトロール
なだらかな句碑の小径や水引草

篠田 清秋

島田 昌子

(一葦)

犬と見る富士と江の島初日の出
梅雨明けや家に保護犬迎え入れ
敬老の日姥捨て実は長寿里
ハロウィンや戦死兵達化けて出る
クリスマスプレゼントせよ地の平和

大寒やナースコールの途切れなく
点滴に確かなリズム春近し
菜の花のお浸しものせ配膳車
爪切らぬままに退院春浅し
病院の栄養指導水温む

篠原 広子

清水 和徳

(天為)

(天為)

落日を背に蜘蛛の囿の静かなり
葉も泥も鳥らつきよの届きけり
捨てらるる苗にひとしく雨の降り
カンパネラと話しかけたき星月夜
自炊棟へ分かるる廊下黄菊咲く

はらはらとえご散り来たる九十九折
駄菓子屋の軒の低さよラムネ飲む
大汗の漢の首に豆絞り
夕顔や父の鼻歌湯殿より
長靴の足裏の見上ぐ翳雲

四 郎

(天為湘南)

花に雨 エゴン・シーレの憂い顔
深更や野分吹き荒れ鬼の声
花は今 引継ぎ済みて机拭く
春雨のシヨパンのワルツ 駅ピアノ
雨音や庭を眺めて猫うらら

鈴木 千枝子

(天為湘南)

秋霖の香一筋のくゆりかな
ウキスキーの琥珀に透ける秋の燈
風紋の流るる果ての大銀河
行く秋やクロスワードの埋まぬ枱
長き夜の紅茶に添へる砂時計

鈴木 絹子

鈴木 千砂

(冬すみれ)

(鷹)

悠々と雲沸く峰や黄菅咲く
ふわり被る父の匂いの夏帽子
椅子二脚持ち出す朝や百日紅
秋茄子を鳴かせて洗う厨かな
棕の実やまだ生きているポンプ井戸

伽羅露に一合半の女酒
徽の香や蔵書票には父の筆
花合歓の魔法にかかりまどろみぬ
濁流の上に濁流梅雨出水
骸となりて向日葵のなほ余熱

須藤 亮

栖原 由美子

(鷹)

(鷹)

父の日の忘れられしか一人居す
紫陽花の色はおそらく雨の色
裏庭を進む蛇ありただ見つむ
少女みなすすくすく伸びよ立ち葵
無住寺に人影のあり夏木立

竹伐るや地下の男のはだしたび
地祭に切麻舞ふや小春空
春永や水琴窟に耳あてて
芥舟をゆらす寒鯉緩る緩ると
開店の湯屋に人待つ日永かな

須藤 かぐや

角 和富

(鷹)

夏至の日にひとり酒してまだ暮れず
潮騒とキューバのリズム海の家
炎帝や御屋敷崩すブルドーザー
遠火花あちこち見ゆる相模灘
庭涼し一步一景愉しまん

炎天下流れる汗は悲鳴かな
施設にて演奏したり汗ばみし
病院で告知受けた日原爆忌
極暑日の山火事はみな非常かな
つるつると冷素麺を流しけり

すみこ

関美晴

(天為湘南)

(波)

大寒やえいつと気合の寝床から
啓蟄をわかるか虫たち動き出す
蒲公英の寄りそふ姿SDGs
秋茗荷よいしよとふんばる鉢の下
肌寒し始発電車の音遠く

猫眠る江ノ島一丁目の余寒
茅花流し海空つぼの水平線
花梯梧手折れば傷のなほ香る
紆余曲折にじむ風格裸の木
千歯扱き子らの声湧く小春の日

隅田泰子

関本朗子

(天為湘南)

(天為湘南)

靴ひもを結び直して梅雨晴間
豌豆の莖にミニーの絆創膏
黙禱に蝉の唱和のいちだんと
思考力どこかへ忘れ残暑かな
塩小匙一のレシピやなめくぢら

おぼろ月更地に還る家屋敷
僻耳のふたりとなりぬ胡瓜揉
日晒しのシートの硬さ夏の果
ひとり行く道の暗さや遠火花
しじみ汁振り返らずに子は発てり

草心

高瀬俊次

(くら)

風にのり甚句の届く夏祭り
江ノ島の花火動画をじいばあへ
窓枠を額に飽くなき秋風情
広広とビル建つ前の空高し
どこまでも空の青さや秋刀魚焼く

偏屈な漢は行かぬ片かげり
はんざきは哲学の徒かものぐさか
吾になく子にはあるらし夏期賞与
浅草の大暑引つ張る人力車
語り部のまたひとり逝き浦上忌

高久弘行

高野尚志

(天為湘南)

(くら)

老耄の集ふ学校窓若葉
老幹の力まだまだ梅真白
桐一葉老後大事に生き抜かむ
露万朶百歳超ゆる九万余
百歳を見すゑ十年日記買ふ

み仏の紅美しや寒の内
春の灯や母のやうなる占ひ師
炎天や岩場に垂るる命綱
何もかも捨ててひかりの芒原
冬北斗一誌の指針ゆるぎなし

田中 梓

田中 素子

(天為湘南)

(天為湘南)

夏旅をほどけば空と海の青
幻燈会おさげ髪の吾君の夏
躍りゆく盆の闇へと西馬音内
尼寺の門扉に結る秋の蟬
阿と畔の間合ひに霧のよぎりゆく

放水にすかさず鳴けり秋の蟬
吾の影に舞ふ朱の色や秋の蝶
野分あと海鳴りやまぬ夜更かな
天指して叢がり咲くや曼珠沙華
古代史の百済遠征読む夜長

田中 千佐子

田中 洋子

(湘南若葉)

爽やかに父の晩酌よみがへる
新蕎麦と地酒と父の居る景色
相馬焼に父の手触り新走り
長き夜や書き込み多き父の本
父の忌はジングルベルの届く頃

ひそやかに香のこぼれをり薄紅梅
胸中の夫に一献夏の月
短夜や乱れしままの写真集
遠くて近し黄泉の国より虫の声
悠久の川音へ飛ぶ赤とんぼ

田辺 年子

手塚 智之

(天為湘南)

(みちくさ・かわせみ)

身に入むや若人尽きて英兵墓
退職し近所で完結日日うらら
秋場所や勝負の刹那美学なり
消防士の人気の昼は豆御飯
秋の川強き流れに嘆き捨て

花筏押し流してや鯉の群れ
鉢植えや枇杷の実七つそれなりに
梅雨入りや妻と二人の大欠伸
どこいくの母の口癖炎天下
原爆忌悲しみ超えて夏木立

千葉 民子

常盤 貴美子

(冬すみれ)

夏萩にふれてのぼりぬほとけ径
背負ひ籠に小菊も容れて里の婆
アルプスは真向にあり蕎麦の花
秋日燦相模の海の平らかに
むかご飯山の夕焼けつれて来る

一椀に野辺の明るさなずな粥
点描となる釣り船や島の春
洗うごと青田に風の行き渡る
秋思ふとキリンの長き睫毛にも
数え日の歩幅となりて小買物

朽尾 まほ

永井 かほる

山鳩のシルエットのみ霧の朝
天高し空を映せる玻璃磨く
犬の尾の炎となりぬ秋夕焼
蔵町の青空に藍秋のれん
秋の夜の空白埋めるガラスペン

(波)

紫木蓮布教の人を歩ましむ
よみがへる胡蝶蘭より夜の調べ
砲兵のごとき向日葵列をなす
燈火親し万葉集に夜の更くる
鯛や一山の闇迫りくる

内藤 繁

永塚 享司

(天為湘南)

秋天や刑場址に大本堂
土牢に一宿一飯稲びかり
潮騒に夢を描きて寝待月
土牢の上に土牢月鈴子
土牢や出入り自由な秋の虫

夏の宵縁台出せば星の降る
ひまわりのあちこち揺るる迷路かな
名月や今宵は妻とハイボール
夕闇に灯火の如き彼岸花
窓開ければ木犀の香の鼻先に

中村 初江

成岡 明子

古書店の黴の和綴をそつとそつと
梅雨深し友逝くを知る同窓誌
緑蔭や葉挟んで唼閉づ
香合は鎌倉彫に風炉じたく
ジエラートの色とりどりに通り雨

(xox)

(xox)

打ち水の終りは今日の我に向け
摩崖仏の涙なりしや滴れり
昭和から現に戻る昼寝覚
麦藁帽に遊び足りたる日の匂ひ
応援の声も日焼けの母校愛

中村 みき子

新坂 雅子

(xox)

(波)

菖蒲湯少し背筋の伸びたやう
新緑や抱つこべルトの父ばかり
足ること知る幸せや蝸牛
緑蔭や今は友とも言へる子と
夏の川子ら町中に見守られ

山百合やきりぎしに聴く谿の声
朝顔や婆の山家の水の音
野に展ぐ捩摺草の恋の詩
八甲田山ケーブル乗場の花嫁菜
機関手の手を振る鉄橋秋高し

西野洋司

野原青

(湘南俳句文学研究所)

(さら)

先づ富士の湧水グイと年明くる
妻間もなく入院満開薔薇の庭
妻夙に癒えよ若葉のそよぎある
どこからか音楽薔薇に指刺され
友迎ふ日なり全開ハイビスカス

湿原を斜めに走る緑雨かな
そよそよと薔薇のガゼボのティータイム
青富士のここををるぞと梅雨晴れ間
敗戦忌仏間の遺影若きまま
「語り」聞く子ら沈黙す原爆忌

能勢マサ子

野村悦子

(天為湘南)

(湘南若葉)

夕焼へ近づく港の観覧車
凜と咲く清香の梅へ背筋せり
畦道や紫陽花水車の音高く
夕暮れの祭り囃子に下駄の音
テスト百点ご褒美カレーは秋の色

千草の供華あふれむばかり矢倉仏
亡夫に点す秋七草の絵蠟燭
遠く来て放生池の蜻蛉かな
その丈を雨したたかに男郎花
老猫の見向きもあらず猫じやらし

橋本信一

初鹿光子

(さ)

病得し姉の声聞く年賀かな
若き日の別離を想う水芭蕉
ジョージアの森にただようハナミズキ
ふるさとに水溢れんか台風来
ふるさとの友をしのびて窓の雪

沙羅の花幾十散りてもの言はず
緑さす武蔵野御陵へ白き道
みどり児のよく動く足夏はじめ
雷鳴や吉兆なれと手を合はす
百歳の角張った文字夏便り

畑中典子

原田稔

(天為湘南)

秋草に足取られたる小径かな
秋茄子の色を愛でたる夕餉かな
八朔や京の舞妓の艶姿
港町海に色差す薔薇の園
段葛さくら吹雪に笑顔かな

海棠や目覚め促す風優し
凜として虫を拒まぬ花胡瓜
初島や肩寄す親子桜かな
台風の空見上げる濡れ鳥
江の島や悠然と打つ冬の波

原戸正子

平岡法子

(天為湘南)

(冬すみれ)

蓴採る小舟寂しき沼の上
夏木立空を仰いで深呼吸
薔薇の香や巻紙とりて硯出す
秋刀魚焼く見つめる二人細くなり
五月晴笑顔あふるる一両車

春近し友との会食願いおり
春彼岸入れ替わり来て子ら元気
戦なき日をつなげたき一遍忌
十五夜に雲遊ぶさま見守りぬ
数え日や余白少なき予定表

原山 テイ子

廣崎 龍哉

この径が好きです大樹の上に秋
月がもう眠たくなって夜が明ける
たつた今すれちがいけり秋の風
静かなる胎動冬の海に来て
喜んで良いやら桜満開に

万物の輝きわたる初日かな
春の空キリンは首を持って余す
風鈴屋銀座の風も売つてをり
行く先は風にまかせて草の絮
枯蟪螂戦意いまだに衰へず

福田 善吉

藤田 真知子

(冬すみれ)

(天為湘南)

腕まくり窓一面の春を拭く
男手の少し粗切り胡瓜もむ
海に沿い軽ろきペダルや夏に入る
夕暮れの町に潮の香卯月かな
ほつくらと野面の夕日春近し

詩心を与へよ吾に寒昴
父の手の木彫の菩薩風薫る
能管の昂ぶる調べ梅真白
一湾の万丈の黙星月夜
神舞の能管一声天高し

藤田 松邑

藤森 楓

(天為湘南)

同窓の仲間の案内歌う秋
菌の乱負けるな八十路妻共に
八十近し早逝父の倍の秋
初孫の修学旅行や秋日光
遠足地江の島近くで半世紀

点滴のホスピスの窓星流る
秋夕焼赤毛逆立つ双生児
波高き浜に海豚と標本土
狐火や電話不通の二三日
オカピの縞縞タイツ冬ざるる

古屋 さちこ

(天為湘南)

つつじつつじ歩きてもまた歩きても
葉桜や見合の返事先送り
炎暑日の家事一切を休みけり
厨房の窓に名月指定席
お手本をなぞりて書くや筆始

保里 よし枝

(サンシャイン句会)

空箱の隅の指あと秋思なる
こおろぎと一夜限りの同居なる
秋しぐれ腕に前夜のやけど跡
同じ処つまずくピアノ小鳥くる
ねこじゃらし私あずけている主治医

堀口 みゆき

(鷹)

ハロウィンの魔女と乗込む観覧車
街路樹の等間隔の寒さかな
ミサイルも黄砂も飛ばぬ日のひかり
噴水やプードルの胴刈られ瘦
病人の秘密聞きをり青葡萄

馬来 まち子

(サンシャイン句会)

竹裂ける音して寒の明けにけり
方丈に人声のあり麦の秋
透通る毛細血管麦の風
朝勤へ僧の摺足もずの声
表札は父の名のまま松手入

松平 恒夫

(天為湘南)

風光る母にポーズのランドセル
囀や右往左往の遠めがね
グランドに鳥のスキップ芝青む
土手日和蓬摘む人走る人
草いきれ太陽パネル並ぶ過疎

水沼 富子

(x20)

青梅や孫が待つてる梅ジュース
蝉の声降りて積もるや山の寺
サングラスかけて大人の気分なる
向日葵はなべて夕日に背を向けて
忠霊塔に父の名ありて敗戦日

三品 敦子

(天為湘南)

万物がスローモーション春の川
似たるもの孫とひよことチューリップ
感情の出せぬマスクし卒業す
スピノサウルスに輝く瞳こどもの日
夕焼に染まるケチャックバリ想起

宮川 敏江

(波)

谷戸奥に水車うなりて山法師
杜鵑草一点物の染上がり
時刻むかに清秋のマンドリン
返事なき上がり框へメモと栗
足場組む本堂奥の一寒灯

宮地敬子

森田順子

(天為湘南)

水仙の母にも似たり凜と立つ
幸せの五弁のどくだみ白栄えて
奪ふ鳥笑ひとばして遠足の子
屋根を打つ雨音響く秋意かな
主去り影引く窓に小鳥来る

寒の水うがひののどにひびきけり
つちふるや楠千年の幹のこぶ
まづ富士に挨拶夏のはじまりぬ
実むらさきの小路に迷ふ日暮かな
聖樹すゑて雑踏の夜のととのひぬ

宮永武彦

森本明美

(はまへ)

山嶺の傲り鎮める秋夕焼
行く秋を見送る君も茜色
小町通りにラテン語溢れ秋うらら
錠剤を半分に分る夜の長し
人が好き熱爛の身に染み渡る

土筆摘む指ほのかなる地の温み
花は咲く非常の世にも惜しみなく
黒南風や若き残像逗子の海
さわやかや語尾やわらかく伊予訛
僧侶行く遊行寺坂や風花す

柳生恵子

柳蒼柳

(天為湘南)

白障子ほのやはらかき閑居かな
朝顔を数ふる暮らし今日もあり
束の間を灯す一輪螢草
十国の秋風束ね峠道
糠床の旨味育む夜長かな

(神奈川現代俳句協会・辻堂句会)

律儀かなこの日に咲きぬ彼岸花
むら雲をけんけん遊ぶ望の月
明月や盤上をどる烏鷲の影
黄昏のなぜか胸うつ鯛のこゑ
黄落や大判小判撒く如し

矢口美都子

山口愛子

(あいら)

図書館の黙に身を置く梅雨入りかな
夏館瀬音高きに目覚めけり
サーファアの髪より落つる潮かな
夏果つや鞆の底の一センチ
濡れ髪に指櫛あつる夜の秋

耳打ちの髪のにほひやラベンダー
巴里祭雑踏に聞く駄ピエノ
藝変身願望捨てきれず
この星の闇は深いと青葉木菟
車椅子回り道して落葉踏む

山下 巖

(湘南アカデミア)

渋柿や卒業写真はセピア色
天高し草食^はむ牛を守る犬
毒を秘め咲き乱れおり彼岸花
教室の壁に君の名卒業す
露草や空の青さに勝る青

山下 遊 児

ラッパ水仙なんだか嘘をつかれそう
花粉症女の顔がピカソめく
戦争とパンダのニュース亀鳴けり
枯蟻螂ソクラテスには成り切れず
わざわざと落葉を踏んでいる僕だ

山田 潤 子

(天為湘南)

ほどけゆく光のかけら薄氷
尼寺の煙る竹林梅雨深し
蒼天に応ふる青き夏の潮
絹雲の広がる空や神の旅
赴任地へ遥かなる空寒昂

山田 貴 世

(波)

雛と生く昭和平成令和の世
外つ国の戦火いまだに竹の秋
師よ友よ巡る霊園春時雨
秋日和日の本一の富士全容
大寺へ裏道小道落葉道

山-之-口 春 美

ふみ箱の古き写真や麦の秋
終戦日母の昨日はケンケンパ
朝練の声弾みおり解夏の町
鬼やんま避難訓練偵察中
わあんわあん泣けばよかつた枯野かな

吉 田 秀 子

(天為湘南)

どことなく吾に似てをり春の蠅
秋の田のこの金色^{きんいろ}は誰のもの
蟻がいく先達もなく殿もなく
今日ほどくそれとも明日ぼたんの芽
さまざまな修羅をしづめて山眠る

山 本 協 子

(なら)

夕立や本のやうには行かぬ恋
緑蔭やハシビロコウのやうな母
青梅や辛口の愛ははの愛
末つ子の手を引き回る夜店かな
冷し中華好きの理由は紅生姜

吉 田 結 香

(藤沢市立大鋸小学校五年)

かげ満ちゆく 水面^{みなも}に映る 照紅葉
息白し パン屋のとびら いい香
冬の朝 ふとんから出る また入る
いちようの葉 緑と黄色の つな引きだ
茶の緑 菊形の菓子 疲れとぶ

米澤 然

朧月我もほぐれてゆきさうな
春嵐仔犬負けじと仁王立ち
バス逃し広がる大地風薫る
子にならひ芝に大の字空高し
笑栗の流し目について手を伸ばす

渡部 喬

(xoxo)

浅葱色の沼底までも夏の闇
水槽の魚と眼の合ふ大暑かな
原罪の色は原色大西日
産土の沼を離れぬ鬼やんま
我もまた漂流せしや秋汀

渡部 有紀子

川音の遠く近くに稲の花
型打つて加賀の菓子抜く音澄めり
手水舎の水音細き木賊かな
夕風やまだ螢みぬ螢籠
絵具を溶く指の細さや十三夜

(天為湘南)

第一二八回市民俳句春の大会

令和五年四月二十八日、藤沢市民会館第一
展示集会ホールにて開催。

参加者一一五名。応募者百二八名。

講演 角谷昌子氏（俳人協会理事・国際俳
句協会理事）

― 季語を生かす ―

入賞作品

○特別賞 山下遊児

菜の花や父の匂ひの農具小屋

○特別賞 島田昌子

幸せを零さぬやうに桜貝

○市長賞 福田善吉

腕まくり窓一面の春を拭く

○市議会議長賞 前田弘子

また一羽加はる影や春障子

○教育委員会賞 増井智子

春北風余白少なき墓誌ぬぐふ

○俳句協会賞 上春那美

ささくれの地球に浸みる春の雨

○協会賞（以下同） 川路ゆさ

たましひや例へば真夜の八重桜

山盛りに揚げるコロッケ春の昼 河村笑

寺田篤弘

老いて知る妻のやさしさ花菜漬 佐藤享子

パレットに色足すやうに春さざす 永井かほる

ふらここや少年自我の風を切る 山田節子

落日の大地を制す野焼きかな 藤井素

万物の尖りを撫でて春の風

母の日や百歳の笑み皺の中

初鹿光子

ほがらかな媪百歳山笑う

村上京子

ここよりは支流に分かれ花筏

中根美保

風光る回転木馬塗り終へて

清水和徳

嘘ぼろりくるりと廻す春日傘

石垣みち代

春一番雀に身を寄す雀どち

坂本きみよ

先頭のたくみな交代雁帰る

鈴木千枝子

アトリエに大きな鏡春の雷

前田恵美

白蝶について行こうか岐れ道

酒向昭

寄せ書きの君の名見つけ卒業す

矢口美都子

春泥の靴づかづかと児童館

松坂真理子

地図になき島の名あまた流し雛

堀口みゆき

龍天に登る江ノ島大灯台

青木敏行

和菓子屋の菓子の色より春めけり

中村初江

丁寧に洗う絵筆や水温む

鈴木絹子

春の昼抱く子ふはりと寝入りたり

植田裕子

まつ青な空搔き抱く辛夷かな

高橋寛子

大観の富士浮かべたり朝霞

紺谷健一郎

水口に睦びあふ神種漬花

高橋純子

山小屋の賢治詩集や春灯

徳江祐子

木の上に追ひつめられて猫の恋

山本協子

第四十八回一遍上人忌俳句大会

令和五年九月十七日、時宗総本山・藤沢山清浄光寺(遊行寺)大書院にて開催。

参加者八十名。事前応募句による参加は一二二名。

講演 岸本尚毅氏 (「天為」「秀」同人)

―俳句鑑賞の楽しみ―

文豪の俳句を読む―

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞

底紅や母の遺品に父のもの

山下遊児

○青木賞

一遍忌草に埋もれし道標

酒向 昭

○北澤賞

一遍忌風が言葉を運びくる

大坪 正美

○市長賞

一茎の稲に手塩の重みあり

高橋 きよ子

○協会長賞

秋風や父母なき郷の沈下橋

亀倉 美知子

○協会賞(以下同)

秋耕や天地を返す力瘤

松坂 真理子

廻廊に水の匂ひや一遍忌

中根 美保

背の子も体を揺らす盆踊り

中村 みき子

露草や猫の道ある堂の裏

大谷 祥二

刈り残す畦の数珠玉一遍忌

加野 哲朗

沢鳴りの棚田をめぐる虫送り

横山 節子

遊行寺の秋冷およぶ床の艶

渡部 有紀子

池の鯉影深くせり今朝の秋

宮澤 進

かなかなや日陰る山も照る山も

鈴木 絹子

新涼の水をめぐらす大書院

野木 桃花

鬼灯や母の齢に寄り添ひて

佐野 健

一望の海へなだるる稲田かな

富山 ゆたか

竹林に差し込む光一遍忌

山本 みか子

新米の粒は泪のかたちかな

鈴木 基之

藤は実にはひとりつきりの時の濃く

大本 尚

いくつもの橋すぎてきし一遍忌

川村 研治

花芒記憶はやがて透明に

尾崎 竹詩

遊行忌や案山子のやうに何もせず

神谷 章夫

爽やかや兄弟で押す乳母車

島田 昌子

爽やかや弥陀の御前の句座にゐて

鹿野島 孝二

爽やかや大き木魚に大き撥

加野 哲朗

風いくつ乗り捨ててゆく蜻蛉かな

堀本 裕樹

爽やかや廻廊わたる風のいろ

小松原 キイ子

当日句の部 入賞作品

○遊行寺賞

爽やかや兄弟で押す乳母車

島田 昌子

○青木賞

爽やかや弥陀の御前の句座にゐて

鹿野島 孝二

○北澤賞

爽やかや大き木魚に大き撥

加野 哲朗

○市長賞

風いくつ乗り捨ててゆく蜻蛉かな

堀本 裕樹

○協会長賞

爽やかや廻廊わたる風のいろ

小松原 キイ子

○協会賞（以下同）

伊藤 真理子

秋蝶の風におぼれて風にのり

岩谷 明子

菩提子のこぼれて老いは音もなく

清水 和徳

クルス買ふ寺領の庭の蚤の市

佐野 健

爽やかな眼差しに逢ふ一遍忌

植田 裕子

破蓮の鉢に残りて日の強し

中根 美保

爽やかや玉砂利きしむ開祖廟

尾崎 竹詩

爽やかや大屋根空を押し上ぐる

関 美晴

とんぼうや手水に触るる水のしわ

神崎 芳孝

思いだすように吹く風爽やかに

常盤 貴美子

爽やかや直線に伸ぶ船の水脈

吉本 史子

爽やかな窓拭く僧や背のびして

石崎 晃笹

転がれる石さはやかないのちあり

前田 恵美

ざつと読む効能書や秋暑し

廣崎 龍哉

秋晴や亭亭として大銀杏

神谷 章夫

さはやかな人を迎へて一遍忌

堀口 みゆき

境内に続く校門芙蓉の実

渡辺 正剛

一遍忌杖つくことも堂に入る

馬來 まち子

一遍の踊り場跡や彼岸花

第一二九回市民俳句秋の大会

令和五年十月九日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者百十一名、当日の参加は九十六名。

講演 霧野萬地郎氏

―サファリ(旅)と俳句―

○教育委員会賞

千葉 民子

むかご飯山の夕焼つれて来る

○俳句協会賞

関 美晴

柿日和声の通りのよき日かな

○協会賞（以下同）

上春 那美

命名の墨の香立てりけふの月

小林 和子

引退犬にハーネスの痕秋日澄む

矢口 美都子

天高し鋏を支へに一呼吸

山下 遊児

干柿に父より深い皺がある

古市 シゲ子

曼珠沙華飛び火している森の中

加野 庸子

入院を拒む母との萩の道

山田 節子

青空に線描く自由赤とんぼ

入賞作品

○市長賞

畑 昌子

遺されし鍵のさまざま雁渡る

○特別賞

中根 美保

鯛の水引くやうに止みにけり

○特別賞

大平 雅芳

鮭のぼる川瀬は夜も逸りゐて

○市議会議長賞

川路 ゆさ

青春のこぶしの堅さ花梨の実

海べりの道は弓なり秋灯し

富山 ゆたか

我が身攫われたくもあり葛嵐

安部 衣世

老いし母夜なべの針の緩きこと

小高 秀則

今少し夢を下さい大花野

石垣 みち代

紫の袷紗捌きや菊日和

森本 明美

庭花火つくづく夫婦二人なり

寺田 篤弘

テーブルの広く思へる秋思かな

中村 みさ子

秋暑し床にころがる飲み薬

馬来 まち子

ぐつたりと川流れゆく残暑かな

原 雅子

小鳥来る人に会うたり話したり

原山 テイ子

播粉木に手応え確か実山椒

坂本 きみよ

稔り田を鎮めて迅き雲の影

伊藤 真理子

溢蚊を連れて暖簾をくぐりけり

佐野 利典

短 歌

鮎澤 永二

生きることは愛することと美しき四季の歡びを沁みじみと言ふ
人生も一日ひと日が卒業式弥生朔日胸に思へる
雲一つ探すに苦勞するでせうと今日の秋晴れをアナウンサー言ふ

市川 セイ

此の世から火災の無きを祈るなり今悲しみのどん底に居て
ああこんな悲しみに会う現世をつゆ知らず生き九十四年
家事農事九十四年余念無く勤めて悲し家全焼は

犬山 俊昭

(花舟短歌会)

放置さるる一代限りの農園の幸いなるかな自然に返る
ともかくも「今は秋だ」の秋の色 セイタカアワダチソウの真つ黄色
これでもかと馬蹄が迫る検眼室追われ追われてそは薄れゆく

太陽をいっぱい含んだ露地キュウリ自分仕込みの麦味噌つけて
コロナ禍を元気にすごし集うのは傘寿忘れた中学仲間
苔むした杉に囲まれ旧街道過ぎし旅人の足跡を踏む

植田 稔

紫陽花のお色直しもつつがなく久しの雨に一時つややか
風見鶏羽根を休めて風を待つ姿ほっこり居眠りのごと
夕焼けの肩にぽかぽか温もりの稲穂めかせる金色の道

大澤 清水

植物園にバイカオウレン見に来ればカメラ片手の歌友と出会う
ほのかなる香に思い出す帯広よりかつて届きし鈴蘭の箱
暑いから涼みにおいてイソヒヨドリうちのベランダ今なら日蔭

小 笹 岐美子

(湘南藤沢短歌会)

この頃の人の名ルビが無くばムリ 漢字の味や韻律の妙
自然保護そのままでなく人の意の好むがままに手を加えけり
「中庸」を座右の銘と心すも時折り自問す我生き様を

加 藤 和 彦

(なぎさ短歌会)

小さき蟬触るれば足を動かしぬ葉陰にそっと置きてゆきたり
母想ふ友の気持ちが伝はりぬ秋の名古屋に穏やかな風吹け
昼顔の句を遺したる叔母偲びわれも道辺の花の歌詠む

唐 沢 小夜子

夏祭り金魚すくいし赤衣水槽狭し時十五年
お向かいの二階の窓にポツカリとマンマル照らす仲秋の月
外灯の元で逆さにもがくもの指さしのべしカブトつかまる

木 村 恵 理

今日も聞く「真摯に受け止め丁寧に」業界用語か総理を真似る
もみじ葉の香染めの色の美しく斯く散りたしと見上ぐ青空
消ゆるかと線香花火は又弾く涙のような滴こぼしつ

黒田良子

小橋和子

さわさわとけやき並木の葉の揺れて五月の風と何を語らん
降りしきる雨を見つめて朝八時出掛けむとするも足鈍りおり
目の薄くなりたる義母の棒針でふんわり編んだセーターの手触り

佐々木波透

(渡内きらり四季の会)

みかん色の車首に日の丸はためかせバス元日の公道走る
ウクライナの子らはロシアに連れ去らる親ごころ如何ましてその子は
ケアハウスに五日めという友のメール明るい部屋か唄っているか

塩崎麗子

稜線に雲居の月のかかりたり花に疲れしひと日暮れゆく
雲間より光さしこむ海面を雨の名残の靄の漂ふ
夫の焼くシヤウエッセンは香ばしく口にはじける日曜の朝

常保恵美子

赤が好きセーター・コート・帽子・靴年を忘れる旅の目印
春だもの8代も跳ねて見るほらほらごらん鯉も跳ねてる
「喜怒哀楽」・一期一会も嬉しくて人に守られ生きる日々なり

高橋美津子

歩行難訪問診療月二回心安らぐ猛暑は続く
流行病に若き友逝きぬ予期せぬこと何故と問い居るみぞれ降りし通夜
友くれし菖蒲の紫あざやかなり薫風の中の景顕ちくる

受験終へ孫は一気に大人びて青春切符手に一人旅
千枚の書道紙抱へ身振ひす書いて書きまくり夢手繰りよす
雑草と決めつけたのは誰だらう草叢にひそと露草の藍色^{あめ}

竹中亮子

束の間の余生とあらば抗わず生かされ生きて今を楽しむ
幸せは気付かぬままに通る過ぐ木木の下枝に降り注ぐ陽の
かけ違う残りボタンに触りつつ音信絶えし友を思いぬ

田村孝子

朝明けの江の島沖に出でて見る陽を浴び浮かぶ富士に息をのむ
朝靄の江の島沖に出でて見る深き白は三途の川かな
秋晴れの江の島沖に出でて見るカモメの群れと釣果を競う

角田美香

(社福)光友会

リサイタル指間にこぼれ煌めきて果てしなき夢ピアノの調べ
コロナ禍も五類とは云えマスク付け思いあれこれ心定めず
白球に若き命の漲りて高校球児燃ゆ甲子園

戸村忠子

(声薫・調和道・歌の広場)

この夏は異常気象に悩まさる天の乱心雨降りつづく
起き抜けに右腕回しを二〇回猫もとなりで背中をのばす
ハロウインの店先に並む大南瓜「食べられません」の但書付く

中田栄子

(花舟短歌会)

ポケ予防脳トレ問題前にして夢の中で全問正解
トラが舞う「アレ」の達成湧き上がり天まで届け怒涛の歓声
ポケ防止脳トレ問題前にしてコックリコックリ睡魔が襲う

原エマ

前原 あつ子
(湘南藤沢短歌会)

亀の子がゆつたり水面に浮かびいる人の世界の争い知らず
海に咲く花のようなるいそぎんちやくヤドカリさんと支え合いつつ
夏空に響き渡れるセミの声短き命ひたすらにして

松浦 みどり
(湘南藤沢短歌会)

白梅の香り訪ねて道行けば地蔵の鈴の音ひとつ鳴りけり
夕立の彼方ににじむ遠花火の音に送られ傘さし帰る
夕さりて灯りなき部屋に風通る蚊遣りの匂ひかすかに残し

三浦 節子

炎天を尚焼き尽くす蝉の声地上の短き命燃やして
朝は蟬夜はこおろぎ鳴き競う昼まだ暑き季節の狭間
青鷺の千歳川辺に佇めりそほ降る雨に身じろぎもせず

見米 素子
(花舟短歌会)

上越の峰みね雲を掻き分けて顔を出したり梅雨の晴れ間に
雨上がり夫の声して振り向けば刈田の上に虹のかかれる
高原の黄葉見下ろす妙高は雪化粧してしんと鎮まる

森 睦子

日を浴びて庭の草木に水撒けば光まぶしき立春の虹
久久の孫らの語らい夢中なるアニメの話に我は入れず
薫風にうの花匂うわが庭に蝶の舞いきてしばし遊べり

山本 澄子

大洪水・氷河融解・森林火災どうするこれから地球沸騰
原発の反対運動せし女の庭に遺れる紅き山茶花
はかなげな紫の花諸葛菜昨夜の雨にも耐へて咲きをり

川
柳

愛子

(鶴沼川柳同好会)

猪が畑たがやす過疎の村
身をうねり大樹の梢涼を生む
雰囲気でわかるふりするカタカナ語
レンズ来て満面の笑み彼岸花
日本を潰すつもりね岸田さん

雨宮則子

(湘南台川柳会)

草茂る実家に通うこどもたち
画面より紙面が好きなドライアイ
玄関にちさい靴たち遊んでる
カフェの椅子女の喋り絶え間なし
小松菜の青の頂点ゆで上手

赤堀晶子

(六会川柳会)

満月もいいが春なら朧月
温泉がそろそろ皆で来いと言う
シミやシワ消せたら美人もつと増え
八十路坂欲はかかずに登り初め
三世代暮せば苦楽倍加する

石川正明

(湘南台川柳会)

帰省時に土産に勝る孫の顔
テキパキと帰り支度の金曜日
家よりも会社でデカイ背中見せ
傷が付き汗が染み込むランドセル
マスク顔心の合図読み切れぬ

井上 朗

小野 敬子

(六会川柳会)

(六会川柳会)

成しとげて希望をつかんだ若いとき
彼岸花あちらで咲かすもう一度
甲子園快音立てる球児たち
通知来たルンレンしちゃう合格だ
出てくるはあれそればかり老年だ

トイレから戻りまごつくツアーバス
欲ないと言われ今さら欲しがれず
軒下の風鈴だけが鳴る空家
若作りしても歩くと歳がばれ
いないないばあしても笑ってくれぬ孫

岡本 昌代

川端 史郎

(湘南台川柳会)

(鶴沼川柳同好会)

背を伸ばせ空から母の叱り声
キヤラ弁はドカ弁となり反抗期
かみ合わぬ会話聴いてるイヤリング
外交のカード出し合う舞台裏
歯の抜けた母の笑顔にさす夕日

コピリ付く晩夏の恋の薄なさけ
寂しさは去り行く君の靴の音
フリーとは雁字搦めの不自由さ
冷やかに唇燃ゆる恋の嘘
虎の仔の隠れ家忘れ大慌て

菊地 政勝

日下部 いくお

(湘南台川柳会)

(湘南台川柳会)

防犯も兼ねコンビニの灯が温い
脱ぎ方に個性が見える靴五足
宴会が赤い気焔に押され気味
女房とときめきもなく待ち合わせ
甘党のくせに晩酌欠かせない

奥の手を読みつ読まれつ五十年
束の間の幸せ置いて孫帰る
ほんのりと酔わせたいのに妻酒豪
退院日帰り支度の軽やかさ
晩酌を終えて職務の皿洗う

今日 一

熊田 松雄

(川柳こぶしの会)

(湘南台川柳会)

留守番はセコムに任せヨーロッパ
物忘れしたことにさえ気が付かず
少しでも痩せて見せよと黒い服
健康は歳なりですと医者が高い
大阪じゃ二つ買ったら値が変わる

やな予感あるかも知れぬ長寿祝
大臣の重い椅子から軽い口
一族が揃えば同じ丸い顔
里の飯母の想いがてんこ盛り
好奇心老いを楽しむ鍵となる

久美子

坂本万里

(湘南台川柳会)

(六会川柳会)

「ガン」という病名「ポン」と呼んでみる
塾をやめ家庭教師はお兄ちゃん
イスラエル非難されない摩訶不思議
五十代話題は介護更年期
休職しやつとなれたわいい母に

松茸の姿は見えぬお吸いもの
遠距離の彼とスマホで月見酒
儲け話誘い断り詐欺のがれ
マスクとり笑顔の君は誰だっけ
悲しみは波打ち際の砂に書く

ケイ

島津富弥

(湘南台川柳会)

駅毎に違う楽しさ発車ベル
まるで菓子糖度が高い今の芋
気晴らしといつちゃネットでお買い物
刻んでもやはり残すかピーマンは
素養ない身には退屈能歌舞伎

教室に未来を託す顔がある
風評に振り回される深い傷
独裁者明日の姿に気付かない
優しさが判る笑顔の無言劇
聞く恥を宝に変えて日々生きる

尚風

菅野とよ子

(川柳こぶしの会)

(湘南台川柳会)

財布から諭吉連れ出すガス電気
断捨離は暇な時ねと二年経ち
欲の果て熱吐く星の最終話
戦の影びたりと付いて離れない
国債務次の世代へ先送る

衰えし音に振り向き目を見はる
愛でて食べ想い出迄も柿の実は
一節の刹那じーんと鼻の奥
すみません聞こえにくさを行く先で
ざわめきと音に釣られてポン菓子を

菅沼雅彦

鈴木明美

(鶴沼川柳同好会)

雨降つて地固まらず大災害
増えるのはしわか薬かどつちかな
歳いくとお出かけ先はクリニック
色も香も好きな花の漢字書けず
AIもコロナの行方読み切れず

親子から女同士になる会話
つかの間の秋を楽しむ忙しさ
ケーキよりあんこが好きな世代です
大佛も世界の言葉聞き慣れる
行き過ぎに気をつけながら医者通い

妹尾安子

田中邦彦

(六会川柳会・鶴沼川柳同好会)

コロナより収まりそうもない戦
近くても国交の無い冷めた仲
穏やかな顔に安堵の見舞客
似合つてもなるべく着たくない喪服
機械より偶には妻のマッサージ

時々がいつもになった皿洗い
間を空けてベンチに座る初デート
一車線もみじマークに抜き去られ
実るほど頭の高い人も居る
にわか雨ところどころはここだった

竹花敏夫

月村克子

(湘南台川柳会)

天井を知らぬ暑さと物価高
喜寿を過ぎ義理人情を捨てて生き
一強に多弱野党の競い合い
現金は値切るカードは遣い過ぎ
句会後の反省会に酒がいる

(鶴沼川柳同好会)

月の夜半彼と一緒に罪と罰
ときめいた美人コンテに書類落ち
首を切るどこまで切るのランコエ
肌寒いいよよ到来酒の季
楽しみは後でと先にひとつ風呂

戸澤千鶴

長屋比佐子

(湘南台川柳会)

後任に譲った椅子に残る自負
飲み放題二日前から胃を補強
過疎の村議員はずっと同じ顔
正論を述べた途端に左遷され
放蕩の息子も戻る母危篤

(湘南台川柳会)

あと二分エスカレーター駆け上がる
お受験は親はコーチでサポーター
起床から出勤までの分刻み
我幸の陰に夫を推した母
扉開け一歩踏み出す再就職

長嶋富士子

西村雅子

(湘南台川柳会)

老い進む夫に寄り添い杖となる
愚痴の鍵閉めたつもりで直ぐ開いて
北満の盛り土の下友眠る
自慢の歯二十四本持ち卒寿
ありがとう五字で相手に幸届け

(六会川柳会)

防空壕居酒屋になり命知る
おわら節胡弓の音色酔いしれる
日本海まばらのとまやみえてくる
風の盆踊るうなじの涼やかさ
湯治場で胸のもやもや消えてゆく

はじめ

(鶴沼川柳同好会)

暑さ越え熱さまでにもなった夏
景気よい話に毘を仕込む詐欺
AIに書いてもらったラブレター
店員に助けてもらおうセルフレジ
あるはずの固有名詞が消えた脳

幡多 純

(湘南台川柳会)

フーフィーこれに耐えれば母になる
余命一年どっこい越えて二十年
口喧嘩和解の鍵を握る妻
市民参加男性まばら伏し目勝ち
敏腕の税理士雇う富裕層

ひるかつ

本棚に残る青春捨てきれず

パパとママどっちが好きにおもちゃ指し
一癖を個性と呼んで自信つけ
老眼になつて若気がよく見える
返納にラストドライブ俺ひとり

深野 いく生

(なぎさ川柳会)

ご時勢か嫁へ姑気を配る
夫呼ぶ声より甘く猫を呼ぶ
真横から伸びた手掴む特価品
レンタルのビデオに負けた映画館
年金の顔で埋まったバスツアー

古木 光江

(鶴沼川柳同好会)

捨てきれず連れて引越し粗大ごみ
地域猫どこのお庭もフリーパス
別腹にスイーツ入る二段腹
大声で怒鳴った後でご飯まだ
瀬戸際で決める一手は勝負駒

紅花 娘

(六会川柳会)

雨の量調整したいなAIで
猛暑越え秋を待ったよ鯛雲
フルーツの収穫間近嵐来る
国造りやつと気付いた子ども庁
空高く散歩も少し遠くまで

前田 みゆき

(六会川柳会)

景気から対象外の人になり
言い訳に出来なくなったコロナ明け
長い夜本を開けば舟を漕ぐ
ちらと見る今は高値の大衆魚
衣替え難しくなるタイミンク

松江 文

(湘南台川柳会)

道を掃く小気味よい音竹箒
種を蒔く雑草生えて発芽なし
新車来た車庫から出さぬ雨予報
姉の背を見て思い出す老いた母
腹減ったオレ成長期えばる声

水城 茂子

村田 和彦

(六会川柳会)

(湘南台川柳会)

いくつかの峠を越えて年重ね
景気良くないのに物価だけ上がり
やんわりと諭す母だが飛ばす檄
手拍子に飛び入りしたい踊りの輪
トンネルを抜けて明るい希望の灯

断捨離で豊顔出すマイルーム
仲人が上手に入れる惚れ葉
沢庵を二回楽しむ耳と舌
意思疎通アレコレソレの老夫婦
前例を守り事故なく天下り

村田 憲治

守田 貴美子

(六会川柳会)

酷暑後の秋通り過ぎ雪だより
このホーム墓地と仏具が付いています
PayPayで払う三途の渡し賃
経営者墓地もホームも同じ人
お賽銭 PayPay 払ご世の流れ

散る花の命惜しむか花筏
夫には妬かれたことのない平和
青空に言えぬ言葉を書いてみる
やりたくない事はどんどん後回し
たまになら独りもいいね寒椿

柳澤 いそ江

吉田 節子

(鶴沼川柳同好会)

(六会川柳会)

手は泳ぎ足はもつれて阿波踊り
たおやかに顔は見せない風の盆
腕白の何を褒めよう親の前
褒められて人違いだと言い出せず
夢の中海越え拉致の娘を捜す

リボンだけそれでももうれし七五三
汗ぬぐいそろそろ咲こう彼岸花
しとしとと風情ある雨今どこに
ダムの下古い建物こんにちは
平和だけ唱えて核に囲まれる

やまぐち 珠美

吉野 健司

(湘南台川柳会)

(湘南台川柳会)

対峙する椅子北向きと南向き
煮ごごりになつてしまった志
べそをかきながら全速力の筆
雷鳴へ誰もが少年と少女
枯れていく旨味を聴くか凍み豆腐

探し物見つからなくてする掃除
字の上手さ金釘流のお墨付き
干支意識するは年末年始だけ
ブラごみの量に反省する暮らし
ぶつかった相手しだいで決まるケガ

(川柳ごぶしの会)

伸び盛り世界記録も通過点
戦争に学ばず歴史だけ残る
介護の手借りて八十路を謳歌する
AIの進化人間不要論
諭吉さん財布の中に居る安堵

渡辺次郎

(湘南台川柳会)

お隣の夫婦げんかにラジオ消す
負けは負け次を信じてがんばるぞ
今に見ろ君より出世カバン持ち
断捨離もかみ合いません老い二人
コンビニで読みきりました週刊誌

第三十六回 ふじさわ川柳大会記録

日時 二〇二三年 十月一日(日)
主催 ふじさわ川柳大会実行委員会
共催 (公財)藤沢市みらい創造財団
後援 藤沢市・藤沢市教育委員会
会場 藤沢市民会館 第一展示集会ホール
参加者数 九十二名

宿題 「やんわり」 上原 稔 選

五客

やんわりの祖母の道理があたたかい 和子(加藤)
ご期待に沿えませんがと来た通知 壱郎
独裁の耳にやんわり美辞麗句 富弥
やんわりと処理水の名で海へ出る 闘苦朗
柔らかく言われて重い荷を背負う 公男

三才

人
やわらかい口調で斬られ負う深手 健司
地
それとなく妻に離婚を切り出され せいじ
天(市長賞)

軸

顔みれば良い施設よと勧める子 秀夫
やんわりといけず言わはる京おんな

宿題 「やんわり」 上原 稔 選

「まばら」 水野 壱郎 選

「景気」 内田 閑磔 選

「フリー」 加藤ゆみ子 選

特別課題 「越す」 島津 富弥 選

表彰 市長賞 宿題の天の句 四句

宿題 「まばら」 水野 壱郎 選

五 客

フルムーンまばらな記憶縫い合わせ 洋子
 遺産分けまばらになつて行く家族 龍助
 「盆過ぎて魔法がとけた過疎の町」 ゆみ子
 店員はまばらロボット忙しない 象堂
 序の口の土俵に真の好角家 健司

三 才

人

あるはずの固有名詞が消えた脳 はじめ

地

落丁を埋め合う老いのひとつ屋根 鹿声

天 (市長賞)

戦争と平和まばらな世界地図 敏夫

軸

運動会どこか寂しい子がまばら

宿題 「景気」 内田 閑磔 選

五 客

円安はいいの悪いのどっちなの 愛子
 景気良くポイントまくが元は税 敬子
 好況を体験せずに老いてゆく 遊希
 野良しごと景気良くても悪くても よしき
 安売りの品で満杯冷蔵庫 鹿声

三 才

人

また値上げオレも卵を産みたいよ 芳雄

地

ニッポンに半値シールが貼つてある 珠美

天 (市長賞)

火葬場とハローワークは混んでいる 浩

軸

我がモチ期バブル景気のように消え

宿題 「フリー」 加藤 ゆみ子 選

五 客

ひまわりの自由言いがかりで奪う 天晴
 束縛を解かれて知った身の孤独 近下
 無料ではないのおかわり自由なの 弘美
 マリオネットなんか嫌よと離縁状 象堂
 未来へとフリーハンドの描く老後 安沙

三 才

人

繁栄の底を支えているフリー 富弥

地

ユニークな人だ鑄型に嵌らない 昭子

天 (市長賞)

平飼いを夢見て卵生むケージ ゆかり

軸

無骨でもフリーハンドの円が好き

特別課題 「越す」 島津 富弥 選

五 客

マスク越し匂の香りも忘れそう 卓郎
 国境を越えたむこうにある自由 敬子
 余命一年どっこい越えて二十年 純
 望まない医療白寿も越えさせる 眞子
 惚け方が実年齢をヒョイと越え 孝子

三 才

人

僕たちの愛は言葉の壁を越え 薫

地

点滴がとれて鼓動のリズミカル 鹿声

天

半分は知らない唄で除夜の鐘 富夫

軸

卒寿越え十年日記買う意欲

五行歌

秋山昭子

(藤沢日曜歌会)

吾亦紅を
一輪さして
秋を恋う
目立たぬ花が
和室に映えて

新井奈々草

(藤沢日曜歌会)

幼なじみと
ふる里を歩けば
懐かしいワードが
湧き出し
海馬が走り出す

浅野征子

(藤沢火曜歌会)

ふる里の
駅におりたつと
香りの記憶よみがえる
ふうーと一つ深呼吸
この空気がすき

飯田敏一

(藤沢火曜歌会)

収穫の秋がまたやってきた
むせるような稲の匂い
刈り取った後は
はざかけに干す
暮れにはこの米で餅をつく

石川 トシ

(藤沢日曜歌会)

他人ひとに聞かせても
しようもない昔の話
一つ二つ
手繰り寄せて
私を寝かせる子守唄

いわき やすお

(藤沢火曜歌会)

固形洗濯石鹼を買った
置き去りにされない
物への愛しさ
豊かではなかったが
楽しかった時代を偲ぶ

石松 いさを

(藤沢日曜歌会)

庭の雑草が
しつかり増えてきたが
露草も元気に咲いて
「こんにちは」と
存在を誇張している

牛島 芳一

(藤沢火曜歌会)

夢を乗せているようで
儂い：しゃぼん玉
物には必ず終わりが：
という
安心感も乗せて

遠藤 由里

(藤沢日曜歌会)

人の心を
揺さぶるのは
百の言葉より
心からの
笑顔

岡本 まさ子

(藤沢日曜歌会)

教えられるでもなく
思いつきでもない
鳥たちよ
渡りは
旅なのか

緒方 真子

(藤沢日曜歌会)

リュックを新調したら
両手が自由になった
それでは手でもつなごうか
ラブラブカップルみたい？
どう見ても老老介護でしょ

小原 美子

(藤沢日曜歌会)

夕陽は
富士の頂きに
赤い花を咲かせ
花びらは
やみにとけて

菊地敬子

(藤沢火曜歌会)

人が誰も通らない
日本中の田舎の道
たまに老人がトボトボと
赤ちゃん子供を見かけない
逢つてみたい赤ちゃん子供

黒木 允

(藤沢日曜歌会)

「老いは2度ないよ」と
娘に忠告され
本腰入れ取り組む
老いにしかない
喜びや幸せ求め

桑原耐子

(藤沢日曜歌会)

秋色を
愉しむこともなく
カラカラと散る梅の葉
待ちくたびれた
秋に

志 津

(藤沢日曜歌会)

振り向いても 振り向いても
いつまでも手を振っている
ありがたい
うれしい
かなしい

杉本明美

(藤沢火曜歌会)

列車に揺られ揺られて
歌を書く
普通列車は
心の揺れと同じ
心地よい

鈴木春野

(藤沢火曜歌会)

あの花に寄り
この花達には
チヨット長居
四月の散歩は
ミツバチ気分

草 庵

(藤沢日曜歌会)

みんな 何処へ
帰つて逝くのかな
きつと
父さん母さんが待っている
お空に帰つて逝くんだね

高原伸夫

(藤沢日曜歌会)

いつの間にか
読書しなくなった
本が人生の先生
無限の知恵が
汲み取れたのに

高原 美智子

(藤沢日曜歌会)

和菓子には
手の温もりが
感じられる
餅やあんこを
慈しむような

寺田 篤弘

(藤沢日曜歌会)

一日蜘蛛は
動かない
餌を待つ緊張感で
こんな思いで 私は
待つものがあるのだろうか

田中 きみ

(藤沢火曜歌会)

すべて
ころんで
つかんだ手
その手の人が
連れとなる

西田 明子

(藤沢火曜歌会)

AIが進歩し
諸事に処してくれて
便利にはなったが
人間の頭脳が
退化していかないか不安

橋本 圭子

(藤沢日曜歌会)

正面に入道雲
頭上には筋雲
その上は
彼方まで青空
北国の秋空は限りなく高い

ひろこ

(藤沢日曜歌会)

蒼天に
布団を干して
伸びをして
カレー香来る
文化の日

蓮村 詳子

(藤沢火曜歌会)

妹が誕生して
退院する日
病院での会計を見ていた
二歳の姉 ある日突然
「又赤ちゃん買いに行こー!」

細谷 修一

(藤沢火曜歌会)

風雪に耐え
微動だにしない
富士山
内に情熱を秘め
孤高を保つ

松岡雅子

(藤沢日曜歌会)

結い上げて
もらったばかりの
三つ編みを
くると回して
初夏よ

松本希雲

(藤沢日曜歌会)

原爆後行方不明の
小学校の友に
一目でも会いたい
まだあなたは
生きていますか

茂木知恵子

(藤沢日曜歌会)

光があれば前に後ろに
左右に纏わり付き
ついて来る
掴もうにも掴めない
影よ お前は何者なんだ

山口博子

(藤沢火曜歌会)

ちよいと見栄張ったり
ちよこと嘘ついたり
時々反省したり
そんなこんなで人生
過ぎて行くんだなあ

横山礼子

(藤沢日曜歌会)

「がんばったねー」の
ごほうびシール
5才からもらう
ナイシヨね…と
もう一枚 嬉しい

現代詩

溪谷 けいこく

おぐり あつこ

二歳の息子が自分の足で坂道をのぼる
パパはカメラ片手に優しく見守る

溪谷に流れる
あたためられた光の中で
余生を楽しむ
トンボが集団となって
飛び続ける

心なしか
夏よりも手の届く位置まで
心ゆるす
トンボを指先に乗せてみる

ママ何してるの？
透明な羽根は虹色に輝く
一生のなかで一緒に過ごす時間は
限られている

北鎌倉 小坂の彩り

慶野 千賀子

まばゆい朝の 太陽は
平和の夜明けの 暁光か
明日へと続く 道照らす

六国を見る 山あいに
育つ若葉は 爽やかに
静かな枝にも 花が咲く

古(いにしえ)の里 野を望む
果てなき未来 語りつつ
雲の静寂(しじま)に 富士を仰いで

湧き出る泉の名水は
歴史の舞台 見守りて
飛翔(とび)たつ友の 故郷(ふるさと)よ

母を想う

斉藤 絹美

今日は母の日
今、母はいない
仏壇に母の好きだった
赤いカーネーションの花を供える
在りし日の母
いつもにっこりと笑っていた母
私を見守ってくれている母
心から有り難う。お母さん

無罪

坂田 真希子

繭を引き裂き風を感じ
自分の血の暖かさを知れ
硝子を打ち破り外へ出て
雲が消える瞬間を目に焼き付けよ
激しい嵐に身を曝し
雷に打たれて覚醒せよ
軛と釘を焼き払い
身に絡む呪いを焼き尽くせ
熟れすぎた果実に酔い踊り
幾千の鳥の声を借りて歌え
自らの無実を宣言し
躊躇いなく自分を救え

祝婚歌 — 出帆に向けて —

佐藤 裕一

そうか
君たちも航海に出るといのか
たった二人だけの乗組員で
小さな帆船に乗り
大海原に漕ぎ出して行こうといのか

雨 あがり

チズコ・W・クジラ

この大海の向こうに 何が待ち受けているか
誰一人として 知っている者はいない
ただみんな 水平線の彼方には
希望の故郷があることを信じて
懸命に 船を進めているのだ

雨あがりの早朝 窓の外 南天の葉に
ところせましと 大きいのやら
小さいのやら 水滴が――。
朝の陽で ダイヤモンドが輝いているよう
写真に撮ろうと 外に出る
スマホのカメラで カシヤツ カシヤツ ツ
筋力の衰えた 震える足に力を入れ
踏ん張って立つてる 私が映っている

君たちに 幸あれ

海を進む 君たちの一瞬一瞬が

まばゆいばかりに輝くよう

心から祈ろう

君たち

さあ 出帆のときだ

喜寿を向え 亡母の年まであと二年の私が

太陽の光で元気をもらって 励まされるネ

さあ 今日も 一日 頑張ろう――!!

鼻歌

中田 ほとる

さびしいときはおもいだす
 まるくてクールなそのすがた
 深い雪の下の下
 重い土の中ねむる
 まつくら闇があるばかり
 ひっそり閑とするばかり
 雪中キヤベツ 雪中キヤベツ
 甘く甘くなるために
 雪中キヤベツ 雪中キヤベツ
 きょうもひとり雪の下
 雪中キヤベツ 雪中キヤベツ
 甘く甘くなるために
 雪中キヤベツ 雪中キヤベツ
 きょうもひとりねむるのさ
 あまーくあまーくなってきた
 どこからともなく風がふく
 かすかな光のさきの方遠くで空が笑ってる

鳥

中出 隆義

入院の男が眠る
 労働を終えた男が眠る
 刑を全うする男が眠る
 戦争を始めた男が眠る
 生まれた子が眠る
 幼稚園で疲れた子が眠る
 勉強に追われる子が眠る
 いじめっ子 いじめられっ子が眠る
 充分に生きた男が眠る
 充分に遊んだ子が眠る
 充分に生産した男が眠る
 未開の原住民が眠る
 夢の中で男が飛んでいる
 入院の男が目醒める
 窓枠に来た鳥が鳴く
 今度は鳥にならないかというように

涙

ひまわり

とめどもなく涙があふれてきたら
 だまつて受け入れ、涙をながそう
 溢れんばかりの涙。
 そこには、悔しさ、悲しさ、やるせなさ
 さまざまなスパイスが
 散りばめられている
 心の痛み、苦しみを
 その涙で洗い流そう

恋写れんしゃ

水舞 琴実

青い空が一枚
 沈みかけた太陽を一枚
 まばらに雲も一枚
 遠く、山並みが一枚
 まっすぐ道を一枚
 ポピーの花畑も一枚
 季節のフィルターが一枚
 あたたかいエフェクトを一枚
 今日の幸せも一枚
 一番前には君が一笑いちしょう
 最後に、君を好きだつてレイヤー

だから、涙が出てきたら
 こらえることなく、涙をながそう

夢

村上享子

湘南の海はサーフィンのメッカ
春夏秋冬 季節を問わず
良い波を求めてサーファーがやってくる
チャンピオンシップが開催され
プロやアマが技を競う

「東京2020オリンピック」
サーフィンは正式種目となった
鵜沼の海でサーフィンを始めたという
藤沢育ちの都筑有夢路さん
サーフィン女子で銅メダルを手にした

2023年夏の鵜沼海岸
サーフボードを手にした女の子
ボード名は「マーメイド」
夢はオリンピック選手という
「夢っていいね」

オーガニックコットン

山田にしこ

亜麻色の波間に
ただよるのは
わたつみの
よりわけられない
泡 アブク

黒土に蒔かれた種を
育むのは人の手

太陽 水 土 風の恵みを頂きながら

まだ見ぬ反物の
一本の糸を 絡ませ よじりあわせ 編む

地球上にこれほど美しい物が存在することの
帰りを
そつと 教えてくれる

このままでよいのでしょうか

陸井絵夢

楽園が高度成長ごみの島
機密秘密プライバシーは筒抜けで
リモートで管理監視のテレワーク
一日が小さき画面で完結し
雷は天の悲鳴か哄笑か

核エネルギー平和利用は夢の夢
廃炉さへ出来ぬ施設は再稼働
トリチウム記憶も薄め大海原
処理水はシステム内でリサイクル
夕焼やくるつたやうに暮るるるる

戦争を富と英知が進化させ
偏見と群集心理に踊らされ
生命や知や芸術に国境なし
敵を知り己を知れば避開戦
戦時下の平穏な月テント村

隨
筆

白き桔梗ききょう

井 口 鐵 介

高校に入って最初の国語の時間に、先生がこんな質問をされた。

『諸君は中学の卒業式で「仰げば尊し」を歌ったでしょう。その中に「今こそ別れめいざさらば」という一節がありますね。「別れめ」とは何ですか』というのであった。私たち新入生は色々に考えて答えた。

『裂け目、割れ目のように二つのものが左右に分離する意味で、今日こそ先生と生徒、あるいは友達同士が別れていく境目の日だ、という意味ではないでしょうか』

『金の切れ目が縁の切れ目という言葉があります。金の切れる時が縁の切れる時だ、ということですから「別れめ」は「別れる時」のことだと思えます』
様々な意見が出た後で、先生は次のような話をされた。

『諸君はこれから、「源氏物語」や「徒然草」など古文を勉強しますが、その時に「係り結び」という約束があります。「ぞ・なん・や・か」など強めや反語の助詞があると文末は連体形で結びます。「こそ」がくれば已然形で結ぶのです。勧誘や意志や推量を表す「む」という助動詞は、終止・連体・已然形を「む・め」と活用します。「こそ」という強調の助詞を受けて、「む」は「め」になります。ですから「別れめ」は「さあ今こそ別れよう」という意志を表すのです』

漱石の小説『門』の主人公宗助は鎌倉円覚寺に参禅した。境内の一隅にある帰源院で、宜道という若くて親切な僧の世話を受け、十日間ほど宿泊しての修行であった。釈宗演老師から「父母未生以前本来の面目は何か」という公案を与えられた。宗助は苦しみながらも何とか考えをまとめ、老師の前に出てそれを述べた。しかし、老師は『もつとぎろりとした所を持つて来なければ駄目だ』とその返答を一蹴してしまった。

若き日の漱石の参禅は実体験であったようで、そんな縁からか、帰源院の庭に漱石の句碑があり、このように刻まれている。

仏性は白き桔梗にこそあらめ 漱石

この句には「帰源院即時」という前書きがあり、「漱石俳句集」に収められている。前述のように、「こそ」があるので推量の「あらむ」が「あらめ」に変化する。

仏性——人間なら誰れもが持つている仏様のような慈悲の心——は、きつと清浄な白い桔梗の花の如きものであろう、というのである。

芥川の『蜘蛛の糸』に韃陀多という人を殺したり家に火をつけたりする極悪人が出てくる。ある時、彼が深い森の中を通ると、道端に一匹の蜘蛛が這って行くのが見えた。彼は早速足を上げ踏み殺そうとしたが、『いや、いや、これも小さいながら、命のあるものに違いない。その命を無闇にとると云う事は、いくら何でも可哀そうだ』と思い直し、殺さずに助けてやった。どす黒く濁った韃陀多の心の中にも一輪の白い花が咲いたのである。

蝶の道

市川 光 治
(文芸光風)

庭を通り過ぎる、いろいろな種類の蝶は、ここを過ぎたあと、どこへ行くのだろう。

思いついて、一頭のキアゲハ、のあとをつけた。拙宅を出るとその蝶は向かいの家の広い庭は素通りし、その隣の空き地に入った。ひなげしやハルジオンや名も知らぬ雑草の小さな花の周りを飛び回ってから、一気に公園まで飛んだ。

公園を出ると、ひとブロックさきの墓地に入った。墓地にはツツジが満開である。墓地をぬけると隣の広大な屋敷に入った。これでは諦めるしかない、と思っていたら、塀のずっと先のほうから蝶がでてきた。同じ蝶かは分らないが、ともかく見ていると、道路を渡って反対側の畑に入り高く舞い上がって、桜の太い古木の周りを回っている。

この桜は白い花を付ける。葉と幹の様子から明

らかに桜と分るが、花の時期がソメイヨシノに比べて一ヶ月は遅い。従って葉がかなり茂ってから、花が咲く。それゆえ花は葉の陰に隠れ、華やかさはまったくくない。

しかし、花が散り始め、木の下に花びらが溜まり始めると、それらは薄い桜色を呈しているのがわかる。散った花びらはまさしく桜なのである。

蝶は散り残った花の周りをゆらゆらしていたが、ふいと上昇し、青空の中にまぎれた。そこで私は蝶を見失った。

かわりに、桜木の影の散った花びらの中に立つ、黒っぽいワンピース姿の麗人を見つけた。女は小さな花束を片手に持ち、バックを肘にかけたまま、しばらく木の上を見上げていたが、やがて私のほうへ歩いてきて、横をすりぬけ、墓地のほうへ歩き去った。

彼岸は疾うに過ぎたし、盆はずっと先だと思いがながら、私は女の後ろを歩いていた。墓地の中の屋敷との境界は庭木の陰になっている。女はその影にむかい、影の中を塀に沿って歩き、とある墓の前に額づいた。誰かの命日なのか。白い顔が墓石の影に隠れた。

女の顔が見えなくなったので、私が視線を塀の上に戻すと、そこにクロアゲハがずっと飛んできた。木の陰のなから湧いたようであった。黒い蝶は影の中を飛び、また影の中に消えた。

ふと気づくと、黒服の女が墓石の陰から立ち上がって、消えたクロアゲハのほうへ歩いて行った。墓地の先の角を曲がって、女の姿も消えた。

——ド라마チックな秋—— (生きていることが感動の連続!?)

いつでもハッピー

白いテールブルクロスを買った。光沢があって、地の模様があり、とても素敵だ。ライトがあたると、レフ板効果で、ぱっとそこだけ明るくなり、部屋がはなやいだ。

ずっと欲しくて探していて、ようやく横浜の元町でみつけた。新婚当初からの、古いダイニングテーブル。一枚布を掛けただけで、おもてなしの雰囲気

がただよう。これでお客様が来て大丈夫かな？

ピンクのバラのアレンジメントを飾る。初めて、息子が彼女を連れてくると言う。きつと、可愛い人なんだろうな？

今から、ドキドキだ。

春に娘が出産して、男の子が誕生した。我が家にとって、嬉しい出来事となった。何をしても見飽きない。小さな手。あくびをしても、伸びをしても可愛い。出産してしばらくは、食事を多めに作って、毎日のように小田原までJRで通った。心配したが、おかげ様で母乳が良く出て、音が出るくらい元気に飲んでくれる。ニコニコとごきげんな赤ちゃんだ。娘夫婦も協力して、忙しいながらも楽しく子育てをしている。幸せそうで、安心した。

三〜四ヶ月には、首がすわり、寝返りが始まった。おもちゃを握り、音を確認する。

現在六ヶ月をすぎた。ずりバイをしている。そのうちハイハイをするのでは？と、目が離せない。本当に成長が早い。表情が豊かになってきた。手足が活発に動く。

私も、絵本を読んだり、歌をうたったりと楽しく

孫育てをしている。お気に入りの絵本もできたみたいだ。これから、たくさんのお言葉を耳から聞いて、覚えていくのだろう。

南図書館で、読み聞かせのボランティアを始めた。まだまだこれからだが、紙しばい、手あそびなども楽しんで覚えたい。

藤沢に引越してくる前も、歌が好きでコーラスを続けていた。コロナ感染も落ちつき、楽しそうなグループをみつけて入会した。

素敵な先生と仲間に恵まれて、楽しく練習している。今回、藤沢市民オペラ「オテッロ」の合唱に初挑戦。夏から仲間と共に練習に励んでいる。

「おなかから声を出して。もつと深い声で。」厳しくも愛ある指導の先生のお言葉に、身が引きしまる。まだまだ上手に歌えない。毎日録音やCDを聞いている。

隣に座った方と仲よくなり、定期演奏会の招待券を頂いた。ありがたい。勉強になると感謝した。自分だけ、できていないのでは？と不安になる。でも、他の団の方との交流は楽しい。少しずつ前進したい。

オテッロの物語の舞台はベネチア。30年前新婚旅行で訪れた。ゴンドラに乗ると本当に船頭さんがカントォーネを歌ってくれた。美しい水の都だった。せつない愛を思いながら暗譜をがんばり素敵に歌えたらと願っている。

私とウクレレ

梅澤輝也

長年勤めていた会社を退職した時、“これから、これまで出来なかったこと、やれなかったことを…”と改めて始めた事のなかにウクレレがある。気軽な気持ちで始めたが、この四弦の小さな楽器は、音楽の基礎知識から和音の仕組み、コード進行など色々教えてくれている。

ウクレレは、ハワイアン音楽の脇役的伴奏楽器として知られているが、最近ではラテン、シャンソン、演歌からポップスまで、さらにベートーベン第九・歓喜の歌までも演奏され楽しまれている。

ウクレレの元祖はポルトガルの楽器、ブラギーニャと云われている。ハワイ王朝第七代カラカウウ王はブラギーニャの名手エドワード・プルビスを度々宮廷に招き演奏を楽しんだ。小柄なプルビスの“綽名”が、あるいはフレット上の“素早い指の動き”が、ピョンピョン飛び跳ねる蚤を連想させ、これを表現するハワイ語の“ウク・レレ”が、この楽器の名称の由来と云われている。王朝最後の第八代リリウオカラニ女王は、この言葉を同音異義語で「恵の贈物」と詩的に解釈した。

私とウクレレの足取りを振り返ってみると、心に残るものが多々ある。ウクレレを習い始めるとハワイへの関心が次第に高まり、ハワイに行きたくなった。そこでハワイ州知事とホノルル市長に手紙を書いてみた、ありきたりの観光ではなく養護施設などでウクレレ訪問したいと。驚いたことに直ぐ返事が来て訪問先を紹介してくれた。早速、仲間を誘いハワイ諸島の施設を数か所訪れた。三味線を弾く幼馴染も同行してウクレレとコラボもした。日系老婦人のベッドの傍で、共に「故郷」を口ずさみ涙して別れを惜しんだ。現地のウクレレ仲間とポット

ラック・パーティーで親善交流も楽しんだ。

このほか、カムカム英語とウクレレの不思議な縁、テムズ河畔ヘンリでのウクレレ・オーケストラ、眼の不自由な少女との出会いなど、いろいろなことが多々ある。

最近では、音楽仲間のイベントに併せて、私の九十歳パーティーを催した。それぞれのグループの演奏の合間に、私にサプライズの贈物を戴いた。私の好きなバラの花束、記念のTシャツ、これまで関わった活動のスナップ写真と書き、そして後日、当日のスナップアルバムまで戴いた。

いみじくも、リリウオカラニ女王はウクレレを「恵の贈物」と読み解いた。私の手元のウクレレは、これまで多くの素晴らしい人々との出会いと、貴重な体験を与えてくれている。

もう暫くウクレレと共に楽しく、歓びを感じながら生きて行くことにしよう。

終り

負けない諦めない

大和田 三代子
(はまゆう)

「負けない、諦めない」ということを最近の自分への戒めの言葉としてしている。それは他の人との闘いではなく、自分の精神的心の弱さに対してである。

ある人の「負けない人生」の話を聞いて、自分の心の弱さを感じたし、諦めることを潔い、相手に対する思いやりと考えていた。だが最近、エッセイを書いて自分を見つめるようになって、自分がいかに弱いか客観的に見えるようになった。少し前、息子に「九十歳まで頑張って生きる」と言ったところ「なんだ、今は百歳まで生きる時代だぞ」と言われ、自分の性分が弱いのかなと思った。

最近、デイサービスに行くようになって、先日七夕かざりをした時に「健康で元気に百歳めざしてガンバリましょう」と書いて笹にぶらさげた。

また隣りの席の年配の方で「もう何時死んでもい

い」と言う人に「弱音をはいちゃだめ、まだまだ頑張りましたよ」と言っている自分がいた。

いつのまにか「負けない、諦めない」と自分に言い聞かせるようになっていた。

令和五年八月十一日

問題付きお年玉

香 霜 小太郎

ぼくには4人の孫がいる。いちばん上が男で下の3人が女の子だ。

孫には小1で千円、以降1学年ごとに千円ずつ値上げしてお年玉をあげている。でも、ただあげるのではつまらないから、多少の知的刺戟を与えることも考えてお年玉に「問題」を付け加えることにした。元日に電話で解答をもらい、正解なら先に送ったお年玉は自分のものになるのだ。問題が難しければ親などにヒントをもらってもよいことにし

た。それもあって、今まで正解できなかったことはない。

例えば、小1の問題。「すずめがでんせんに23わとまっていた。てっぽうでうったら9わがおちました。のこりはなんわですか」。算数上の答えは14羽。ただし音におどろいてのこりは全部飛び去ったので実際は0羽。

小学生も中ほどになると、例えば、「次の○の中に動物の名前を入れなさい」。「○にかつおぶし。○寝入り。○に真珠。○も木から落ちる」。

さらに小学生高学年では、過去の「全国統一テスト」からも一部拝借した。

中学生になると、例えば、「次の語呂合わせは何を意味するか」「人並みにおごれや」「富士山麓(ふもと)オウム鳴く」。そして孫たちはいずれも東京在住なので、神奈川県統一テストからも一部拝借した。

高校生になると、例えば、「拙訳の英語の元になる有名な和歌、俳句を推定し、またその作者も答えなさい」。

(A) I hope to die under the cherry blossoms in spring around the time of full moon in February.

(B) A little sparrow get out of the way. A horse is about to pass.

それと、健康上「要支援」になった家内が通っている施設でもらった問題、例えば、「次の文字を並び替えて意味のある言葉にしてください」。(A)ははぶめちんら。(B)うんしきよこん。(C)ほちうこんうお。(D)いろだんしこお。を付け加えた。

なお、高3では各大学入試の過去問から一部拝借した。

いちばん上の孫が昨年難関大学に合格したのはうれしい限りだ。

しかし、ほくも高齢になり問題を考えることにくたびれてきた。なにしろいちばん下がまだ小2なのだ。それと、高校や大学入試問題などを相手に出す以上は内容を一応理解しておかなければいけない。

今後は、孫が成人になるまでお年玉は出すが、「問題」はもうおしまいにしようと思っている。

いる。私は外へ逃げた。濡れたシーツを被して空気をさえぎれば消える、と教わったことなどすっかり忘れていた。

母は庭で里芋を洗っていて、「早く消防を呼んで！」と叫び、近所の人通報してくれた。十分後には消防車が到着して消火できたように見えたが、次の瞬間ぱつと音を立てて火が一気に家全体を包み込み、全焼した。

交番のお巡りさんが、水溜りができた庭で「何か夢のお告げとかなかったものかね？」と私に聞いた。確かに火事の夢はよく見た。消しても消しても、また燃え出す庭の木。金属のガードレールから炎が上がっていて、ホースで水をかけても消えない。寝入り端に綱のような不快な物に自分の体が捕えられて回転させられ、身動きできず苦しんでいる夢。私自身が認知症になる予兆なのかも知れない、と思っていた。「毛に火のついた猫が縁の下に飛び込んで来て、火事になったことがあるそうだ。早く家へ帰って、火の元の用心をしなさい」と私は幾度も母に諭されていた。私が年齢の割に白髪がなく若々しい母の髪をカットした時、「私は今何も不満

失火

加藤 寿子

炭になった数本の柱が、焼けただけた屋根を何とか支えていた。実家を全焼させてしまった。一昨年の暮れのことだ。九十三歳の母が、「見たら台所が真っ赤になっていた。とっさに中へ飛び込んで焼け死んでしまおうと思った。」と煤だらけの顔で言った。その時はまだ、悪夢を見ているようだったのだと思う。

私は独り暮らしの母の世話を焼きに行って、汚れのかぶりついた鍋に水を入れて沸かし、それを庭に撒いて捨てていた。戻るとガスコンロの奥から炎が上がっていて、奥の隙間に油が染み込んだ紙でもあり、それが勢いよく燃え上がっているのだと思った。洗い桶に溜まっていた水を一気にかけた。しかし、炎はさらに天井の換気扇に向かい火柱が立った。換気扇のコードには油污れがかぶりついていてパチパチ音を立てて燃え、青い火花が散って

がなく幸せだ」と言ってくれた事が心に焼きついている。

火事の原因は、バルブが壊れて生ガスが噴き出したことだった。私が棚にガラス瓶を置きそこねて落とした時に管の繋ぎ目に当たり、外れてしまっただけ繋がっていたのだ。

『禍福はあざなえる縄のごとし』私は諺をよく知っている。世の中の諺を全部知っているくらいだ」と母は言った。しかし諺が精神の救いになるわけではない。気丈に振る舞ってくれていたのは東の間で、最近は、「いつまで私はこうして生きているのだらう」と嘆くようになった。

私は励ます言葉を思いつかず、困ったように笑い、「あと五年、百迄生きて」と言うけれど、生きていても母の心の中は悲しみが巡る。大きな炭のようになっていた柱は跡形もなく片付き、私は以前の実家の様子を、少しも思い出すことができなくなっている。

百日紅

久保田 文子

(はまゆう)

照りつける太陽に向かい、天を突く勢いで咲き誇る百日紅。冬に見るその幹は、ゴツゴツしててまっ黒。しかも枝だって枯れてるのかなと思わせる。

しかし、春になるとちゃんと枝先から芽を吹き、花をつけ、初夏の頃には競うように賑やかに咲き出す。すると、何とあの幹が、ツルツル、ピカピカ、羨しいほど実に美しい。

「猿も滑る」ので「サルスベリ」と名付けられたそうだが、滑って登れない猿は一匹もいないとか。

足引きの山のかげぢの猿滑り

すべらかにても 世をわたらばや

(藤原 為家)

滑りながらも負けじと生き抜いていくのは人間のほうであろうか。

春、二十年の歴史を閉じた。メンバー一人一人の人生の輝きが詰まった歌の数々を残して。そんなことはお構いなし。今年も百日紅は、ピンクや白、紅、紅紫、色とりどりに元気いっぱい咲いている。

花言葉の中に「雄弁」「愛嬌」とあるが、よくわかる。枝先に群がる華やかな咲きっぷりは、確かに盛んにおしゃべりしているように見える。

今は亡き先輩方、五行歌はじめ多くの仲間たち、家族や親戚、友人たち。出会ってきた人たちを思えば、みんなの笑い声や歌声、騒がしいほどのおしゃべりが聞こえてくるのだ。

青空を拭いて白し百日紅

(紅谷 美美江)

テラスモールに続く並木道は白色。揺れる白はとも涼やかで散歩するには気持ちよい。

私はこの夏も、あなたの魅力にすっかりとりつかれているのです。

散れば咲き 散れば咲きして 百日紅

(加賀 千代女)

咲き散った枝先から、何回でもまた再び芽を出し花をつけて咲く。台風も何のその、秋の半ば過ぎまで、実に百日もの長い間咲き続けるので「百日紅」「ビヤクジツコウ」と呼ばれるのだ。

大庭にある百日紅の並木道が好きで、私は車でよく走る。

天を突く百日紅

今年もみごとに

咲き並んでいます

おふみさんがんばれ!

あなたの声が聞こえます

私のことを「おふみさん」と呼んでくれた今は亡き大先輩のお宅には、大きな大きな百日紅の木があり、毎年ピンクの美しい花を咲かせていた。そこからつながる大庭の並木道。

かつて明治市民センターでの五行歌会のサークルで、私はこの五行歌を詠み、沢山の励ましを送ってくれた大先輩のことを熱く語ったことがあった。

その歌会もコロナ禍で再開することなく、この

わたしは孤独

小池 貴瓊子

『孤独』という言葉はびったり私に当てはまっている。私の為にある言葉のよう……。幼少期は祖母両親姉妹弟と七人の家族で貧しさの中にあっても寂しい事はなく、のんびりと育った気がする。尤も出生した時期は、太平洋戦争真っ只中で恵まれない盛りで、母乳の出ない母だったので赤ん坊の時は、栄養失調でミイラのような目バカリギョロ／＼して骨と皮の惨めな赤ん坊で母の姉妹に気味の悪い赤ん坊だったとよく言われていた。そんな惨めなく赤ん坊が傘寿を過ぎても生きてること自体奇跡で本人も不思議で／＼ならない。小学校の頃は成績も良く、友達からも信頼されて、小二〜小六迄はクラスの級長に選ばれて(役立たずなのに)結構いい気になりまあ／＼幸せといえた。段々に大人に近づき、まわりの友人も全てがよく見えてきてか? 人気も下火になり友人も減って、常に淋しいさみしい青春時

代を送って来た。そして今傘寿を過ぎて歩ける内は独りが一番楽、相手に気を使わずにすむので…。よく／＼考えてみたら所詮人は皆孤独の中に生きて、そしていつかはあの世とやらへ旅立つ身で、全ての人平等に与えられている命に限界があるという事だ。独りは淋しい反面自由がある。自分の思うように勝手に動ける。但し万一の時は誰も助けてくれる人がいないので、それこそ『孤独死』きりないので味方となる人が確かにあって欲しいと希う。

この世で唯一心許せた昔の恩師は、昨年暮れ、96才の人生を全うして去っていった。

恩師への感謝の念は決して忘れていないので春と秋のお彼岸には墓参り丈はして来た。

恩師は『千の風になつて』という唄を好んでいたので『お墓の前で泣かないように』と綴って送って下さったのはまるで遺言のよう…。

千の風になりあの大空を吹き渡って見守っていてくれる亡き父と母そして私が一番心を捧げた恩師のことは忘れず、私は孤立化の中でも、強く逞しく負けずに命の限り生きてゆく覚悟だ。独りでも淋しくなんかない。強がりでもない。私は独りが好きだから…。

「日本のメディアの責任とは」

榊原 百合子

晩夏の季節から、故ジャーニー喜多川の性加害問題が、テレビ、ラジオ、週刊誌でにぎわせる報道が、日増しに多くなった。

おや、と思った。私は米国生活を少しばかりしたのでおかしいな！性加害、性の表現がこれで良いのか？ジャーニー喜多川の行為は残忍なる犯罪だ。だからこそ、性加害ではなく、外国の報道機関が伝達する様に、「性的虐待」と変えるべきであると思う。

この報道の始まりは、イギリスのBBCだった。そしてその発言に「日本のメディアは長年沈黙を繰り返していた」とあった。

まったくもって恥かしいことだ。

不正義がまかり通っていたのだ。長年にわたって、みてみぬふりが、実態を説明しようとは、思わなかったのか？利害関係がある為か、責任は重い。

メディアは、しばしば、萎縮する。忖度する。沈

ら…。大好きな本を読んで過ごしてる時間が、日々とうとうと流れてゆく。唯白内障の目の事、真珠腫の右耳のことが心に引っかかるけど…。

自由奔放の時がすごせるといえ、本音はやはりさみしいものだ。独りぼっちの余生なんて、でもこんな老後を迎えたのも、私自身の選んだ道なので自責の念にかられたり又己を省みようという心が欠ける面もあり結局やはり拳句の果てに我が身を責めつ、この世の終りを迎えるきりなさそうに思える。生まれて来て良かったと思える幸せな一生を送りたかったのに…。与えられた宿命を生きぬこうと決めた。残り少ない余命を自覚して尚も愚かな私は生きている。時には奈落の底に墮ちてゆくような淋しさに襲われるけど…。それを乗り越えて生きて行く事は大変だけれど、頑張る他ない今の我が身が憐れで哀しい。 おわり

黙する。

メディア、政治、企業、のゆちゃくもあるだろう。日本は、ジャーニー喜多川の性虐待問題で国際的に注目をあびているが、正しく向き合わなければこれからの日本の未来はない。

ジャーニーズのブランドで内容のないタレントが、キャスターとして、堂々たる意見をいつているのを、テレビでみて、とても、ちんぷな思っていた事も事実だった。

勿論、海外でも、セクハラ、性的暴行、が問題になり、闇があるみに出た事もある。

華麗なる世界を維持、加担してきた一面もある事も確かだ。

このメディアの問題は、ジャーニーズだけではなく。福島第一原発の処理水の海洋放出も、もっと真じめに、むきあって、透明性を前面に出していかなければならない。

原発は国策であり、国と、東京電力の努力が何よりも大切だ。そして、それをメディアが正確に、国民に報道すべきだ。日本のメディアは安心だ、安心だと。私は原発の事故の発生した福島ではなく、神

奈川県民だから、処理水の海洋放出は関係ないから飲めるはずだと思えば、思えるのだが、それが思えない。

生水ははまだ熱を加える。生水は、はまだ煮るか焼くのだ。心理的に放射性物質への抵抗は消えないのだ。

メディアの仕事は、国民に正確に、早く、安心を伝達する事だ。

ジャーニー喜多川性虐待問題や、福島第一原発処理水海洋放出問題も、日本のメディアの報道責任が問われていると思う。政治、靈感商法、高額献金で問題の世界平和統一家庭連合(旧統一教会)の件は、メディアの責任に加えて、長い事に渡っての政治家の責任は重いと同時にメディアの責任は決して許すべきではない。

鵬外の遺書

自然

森鷗外の眠る三鷹の禅林寺に行ってきた。駅から十五分ほど、立派な門を入ったところに、鵬外の有名な遺言書の石碑があり、原文筆致のままに刻まれている。

「余ハ少年ノ時ヨリ老死ニ至ルマデ一切秘密無ク交際シタル友ハ加古鶴所君ナリココニ死ニ臨ンテ加古君ノ一筆ヲ煩ハス死ハ一切ヲ打チ切ル重大事件ナリ奈何ナル官権威力ト雖此ニ反抗スル事ヲ得スト信ス余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス宮内省陸軍皆縁故アレドモ生死ノ別ルル瞬間アラユル外形的取扱ヒヲ辞ス森林太郎トシテ死セントス墓ハ森林太郎墓ノ外一字モホル可ラス書ハ中村不折ニ依託シ宮内省陸軍ノ栄典ハ絶対ニ取りヤメヲ請フ手続ハソレゾレアルベシコレ唯一ノ友人ニ云ヒ残スモノニシテ何人ノ容喙ヲモ許サス」

要旨は「私は石見人森林太郎として死んでゆきた

い、墓石には中村不折の書にて『森林太郎墓』とのみ、それ以外は一字も彫ってはいけない。宮内省・陸軍など関係先はいろいろあるが、栄典など一切お断りする」といった潔い内容であるが、なにか含むところがあるようにも感じられる。口述筆記ではあるが悪文であり、文豪らしさが感じられない、よほど容態が悪かったのか。この遺書については人口に膾炙され、さまざまな見解が述べられている。

「官僚として長年の鬱屈した不満」「長州閥への恨み」「爵位が授けられなかった屈辱を回避した」「一種の被害妄想」「無一物で死ぬという気概」「文学者であることの宣言」「しがらみに縛られて生きて来たことへの不満」、等々、著名人であるが故の評論がなされ、晒しものにされた感がある。

死に際、彼は自らの人生を振り返っていた。神童として勉学に明け暮れた幼少時代、若年での東大医学部入学、陸軍軍医としてドイツ留学と活躍、現地女性との恋、帰国と彼女の来日、「舞姫」発表、日本女性との結婚、離婚、再婚、五児を得たこと、日清日露戦役への軍医部長として従軍、米飯食を推進し戦死者を上回る脚気病死者を出したこと、海軍との論

争、小倉左遷、逍遙との文壇論争、キタセクスアリスによる戒飭処分、軍医総監就任、文学博士、医学博士、帝室博物館総長、膨大な著作物、戦いのような日々であった、そして望んだ爵位はついにかなわなかったのだ。最後に発した言葉は「馬鹿らしい！」であったそう。

しかし今日、誰もそんなことを知らないのだ。「森鷗外」の名は明治日本を代表する文豪として燦然と輝いている。軍人であったことなどどうでもよい「森林太郎 who?」そんな時代になっているのだ。ペンには剣より強し。

すっかり短日となったなかで、文豪の墓石に向かい合ったまま、わたしは静かな斜陽の中にあつた。森林太郎先生、安らかにお休みください。

「デイ」リハビリを楽しく

篠原 貴子

(はまゆう)

Sさんから紹介されて、デイリハ「ひまわり」に通いだしてから二年になる。

デイサービスに通っている人もいるが、デイリハは午前と午後の通所リハビリである。車での送り迎えは玄関先までで、とても有難たい。顔見知りになった人達との挨拶も、コミュニケーションの始まりだ。スタッフの若い人達が笑顔で迎えてくれる。荷物を持つてくれたり、手を取って歩行を助けてくれて中へ入る。年を重ねるとこんなにも車の乗り降りが大変になるとは、予想もしなかったことである。

毎回席が替り、自分の名前のある所定の椅子に座る。午後二時や顔ぶれが揃ったところでスタッフが交代でラジ操が始まる。そして部屋に並ぶマシンにそれぞれ案内する。

二時間である。あれから十数年もたつと事情も違つて来ることを感じる。

黙つて時を過ごす人、出逢つた友達と世間話をしながらそこそこ女性はにぎやかだが、男性の声はあまり聞こえてこない。若い時はさぞもてただろうと思うおしゃれた男性に声を掛けてみると「いや有難とう」の返事。次の週からはにこにこ向うから挨拶を交すようにもなり、それぞれの人生の来し方を見せてもらっている。

生れる子どもの数も全国で八十万人を下廻り、老人の数はますます大きくなつていく。自分の体調は、自分が一番良く知つているように体調を整えながらこういう社会資源も上手に利用して認知症予防にもつなげてゆきたい。「只今」と玄関を入ると嫁礼子さんの「お帰り」との声が暖かく包んでくれる。さあ今日も百歳めざして頑張ろうと自分に言い聞かせての出発である。今私八十七歳楽しい事に挑戦しながら明日に向つて進んでいこう。

黒板には順番が書いてあり、手際良く運動が進む。待ち時間はほんのわずかだが、頭の体操を兼ねてのプリントが配ばられ、それぞれが挑戦している。私はどうも苦手替りに用されている大人の塗絵を何枚かもらう。

油絵のように色鉛筆で色を重ねながら塗つていくと良く出来ているのを自分でも発見する。パズルの書き方を教えてくれた九十二歳の男性が私の塗り絵を見て注文してくれた。運動の合間をぬって作製する塗り絵が評判になり注文してくれる人もいる。その絵を部屋に飾っておいたところ、「私の作品よ」というと「ほんとう、うそでしょう」とにこにこ話してくれるのも嬉しい限りである。

ある日私をじつと見ている人がいて「どこかで逢つたような気がする」という。マスクをはずしたとたん、「篠原さんじゃないの」とYさん。ダンスサークルで一緒だったフラメンコの名手だ。私はソシアルダンス。数年前のことを二人で思い出して、大いになつかしんだ「こんな所で逢うなんて」と。週二回身体を動かした日は寝付きもいよいよだ。

いろいろな人が通つて来ている。あつという間の

「赤の極み」に魅せられて

澁谷 恵子

題名を何にしようと迷いましたが、九谷焼赤絵細描の第一人者である福島武山先生の作品集のお名前を使わせていただきました。

偶然九谷赤絵の具を手にしたのがコロナ禍になつた時期と重なり、正に赤の極みに魅せられた様に、ここ数年没頭しています。

先日は、昨年続き、福島武山先生のお嬢さん福島礼子先生の、干支の置物の龍に赤絵細描をする講座を受けて来ました。

昨年の兎も白磁に赤絵の具で描いた文様が可愛いらしく、今も玄関に、リヤドロの花々やお嬢さん達と楽しげに並んでいます。

一緒に並べても、どちらも優しい色合い雰囲気です。調和しています。

前日より遠足前の子供の様にわくわく、でも手に負えるかしらと少し不安な気持ちにかられて、東京

の有楽町にある金沢のアンテナショップに出かけました。

当日は、大分余裕たっぷり到着しました。

今年の龍の置物と、初対面の感想は、これはなかなか手強いぞと思いました。高さもあり、一時間半では、どうかな、がんばるしかない、持参したマイ筆と、老眼鏡を徐ろに鞆から取り出します。昨年は、老眼鏡を忘れてしまい、四苦八苦しました。

まず、礼子先生に、基本の描き方をお聞きして、自己流になっているところを反省。

そして、平面でなく、立体なので、どこから描いていくか順番を確認し、白手袋の、指先(右手の親指、人差し指、中指)を切った物をはめていよいよ開始です。

自分で落ち着いてと思いながら、アドバイス通り平面の広い側から描いていきます。

下描きは、薄赤で入れていただいているので、その上に筆に九谷赤で文様を描いていきます。途中お隣りで可愛い形の小皿を描いている方とお話ししたり楽しく描けました。

描いた文様は、まず麻の葉です。産着の文様に託

「ウエッジウッドのマグカップ」

島田成夫

(文芸光風)

いよいよ秋も深まり庭の花は少なくなりました。柿の葉が色づいてきた。今年は2019年に続いて「ラグビーW杯フランス大会」がある。週末の新聞を読む楽しみが多い。毎朝、新聞を読みながら、野菜と果物と「ウエッジウッドのマグカップ」で紅茶を飲む。

このカップは、私が定年退職するとき同僚のT・M子さんがプレゼントしてくれた。Tさんとは同じ職場で一年しか重ならず、教科も違ったためにほとんど話しをする機会も少なかった。

退職の日は、同僚や教え子に囲まれて賑やかに職場を去ったために、Tさんにどのようなお礼をしたのかも覚束ない。毎朝カップで紅茶を飲みながら少し気になっていたので、退職後20年たった2022年3月、Tさんにお礼状を改めて書いた。壊れるこ

した子の健やかな成長など、日本独創の文様だそうですね。その姿が麻の葉に似ているのが由来です。着物の柄として、歌舞伎の衣装から大流行となったそうです。人気浮世絵師が女の人の着物柄として描いています。

次に描いた文様は青海波せいがはです。どこまでも続く波模様、雅楽の舞曲が名の由来です。青海波を踊るための装束の一部に波文が使われていて、光源氏と頭中将が美しく舞うシーンでも有名だそう、私もお気に入りの文様ですが、きれいに描くのは大変です。

予定の時間を過ぎて、二時間位かかりましたが、完成する事が出来ました。

楽しい、とても充実した時間でした。

途中で、礼子先生の能美市の紹介もありました。お礼と、次回の講習をお願いして講習会場を後にしました。

実は長い年数西洋絵付けを学び描いて来ましたが、今は「赤の極み」に魅入られて筆を取り、窯とらめっこする日々を送っています。

とも、縁が欠けることもなく、20年間毎日使い続けてきたことを。

Tさんからすぐお礼の手紙をいただき、また暖かい膝掛けを送っていただいた。

私は今年82歳に成り、重い病を罹っているが、現職の時、退職後たくさんの人々に巡り会え豊かな日々を過ごせたことをとても幸いに思う。先日、城山三郎『辛酸』を読み、連れ合いと公害の始まりになる「足尾銅山」「渡良瀬遊水池」「谷中村史跡ゾーン」と田中正造を巡ってきた。一泊二日の短い旅だが、各処で、親切・丁寧な説明を受けてとても有意義な旅だった。

帰ったら9月28日の朝刊に、阪神地区の「水俣病申請者を全員認める判決の記事」があった。弱きもの、小さなものに寄り添うとするような判決を心地よく読みながらマグカップで今朝も紅茶を飲む。

この旅をもって最後にしよう。まだ行きたいところはたくさんあるが、もう悔いはない。

これからの季節暖かい紅茶の入ったマグカップを両手に包むと暖かい、心も温まるような感じがする。

ウエッジウッドのマグカップで紅茶を飲みながら、毎朝新聞を読み、一日が始まる。限りある時間になってきた。一日一日心地よく過ごしたい。

父の思い出(その一)

白石 多美子

(はまゆう)

父のふしぐれた暖かい手を思い出した。野菜売場で、ししとうを買おうとしたら、父の手の思い出が蘇った。ひとつは、私が小学生で学校を休み、昼休み工場から帰りながら、畑に寄ったらしく、「多美子めずらしい野菜作ったら、今日が取り頃でたくさんとって来たよ」と父の両手に一杯、私もはじめて見る、とうがらしをプックと大きくした野菜。父も名前を知らないが楽しそうに、「洗って焼いて食べよう」なぜか母はいなかった。父がお昼の支度をしてくれ、ストーブの上にその野菜を全部のせ焼けるのを待つ間、どんな味なんだろう辛いのかなと見つめ

てると、「焼けたよ」とお皿に正油をたらしのせてくれた。父が食べるのを待った。父が美味しそうに食べるのを見て、少しずつかじってみたら、辛くなく、肉厚のちよっぴり辛く少し甘味があり、お昼の一品となり二人で全部食べてしまった。ピーマンという名は、大人になってから知った名前だった。

父の趣味のひとつは、ダリヤの花を育てることだ。ダリヤ畑になって、誰にも触らせない。真っ赤な大輪のダリヤ、可愛いボンボンダリヤと何種類もあるのに、めずらしいダリヤがあると聞くと見に行つて種イモを交換してくる。大事そうに父の手にかかえられ、子供達に見せ講釈する父の顔は楽しそう。秋になると冬越の為全部掘り起こして丁寧にわかし大きな木箱のモミがらの中に名前を書いて、一個一個父の手は更にやさしくダリヤの種イモを、埋め込む。私は父の手をずっと見つめている。父に頭をなでられ暖かった手。

今ももっとも父といろんな話をしたかったと思つた。まだ父との思い出が思い出されたら書き続けたいと思つている。

ななかまど

杉山 榮子

(はまゆう)

もう三十年も前のこと。私は盛岡駅で寝台列車を待っていた。

盛岡駅から電車で一時間ほどの友人の家で時間をとられ、盛岡から発車する上りの列車に乗り遅れてしまったのだ。最終は夜行の寝台列車しかない。乗り遅れた列車のキップは買つてあつたが使えなくなつてしまった。寝台車の切符を改めて買い藤沢迄の旅費を計算すると、財布にはわずかにしか残らない。

空腹に耐えかね、駅前のコンビニでおにぎりを二個買った。心細い思いでコンビニを出た私は、美しい樹に気がついた。名札がつけられている。「ななかまど」と。

三浦綾子とか原田康子の小説には、その実がステキに書かれていたのだが、北国に生きる樹のよう

で、今迄見たことがなかった。

「ああこれが『ななかまど』か」。赤いサンゴのネックレスが大木にまわりついているようだ。枝の間から、まんまるい月が照らしている。

実は藤沢に、体の不自由な子供と、やや酒乱気味の夫を残して、男と暮している友人、T子の家に行つた帰りだった。

「この人と暮していたいの帰りたくない」。

「子供の子供M子ちゃんが、かわいそうだと思わないの」。

「子供には申し訳ないと思うわよ」。

泣きわめくT子の前で数時間、耐え難い時間を過ごした私は疲れきっていた。

ななかまどと、月、うつとりする時間が流れ、あおむいていた首がだるくなった。そして、T子の最後の言葉、「榮子ちゃん分つたよ、身を切るほど辛いけどね、この人と別れてM子のとこへ帰るよ」との言葉を信じようと思つた。

あれから何年も後の冬、長男に次女が生まれた。

「名前をつけて下さい」という。長女は夏に生まれたので、夏紀とつけた。次女は、冬に生まれたので

「ふゆみ」がいいと夫がいった。私はためらわず「冬実」と漢字をあてた。

あの夜の「ななかまど」のような娘に育つてくれるようにと思いを込めたのだ。

「ななかまど」の下で食べたあの夜の二個のおにぎりは、コンブとオカカだった。

終

わが母の記

須田 とし子

「人生 生きてりゃ色々あるけど何でも前向きに捉えた方が自分も周りも幸せなのよ」とは、生前の母が口グセのように言っていた言葉だ。

振り返ってみれば母の人生は子供の私から見てもかなりの苦勞の連続だったように思う。20才で愛媛の果樹農家の長男（私の父）の元へ嫁ぎ大姑・小姑・夫・私達子供4人の大世帯をグチもこぼさずいつも笑顔で切り盛りしていた。盆や正月には20人超の親

戚の人達が来て寝泊まり。小学高学年以降の私は、この状況を見て我家の家計はパンクするのでは？と本気で心配したものだ。それでも大勢のいとこ達と遊ぶのは楽しかった。

お客様が見える度に私も母の横に正座して三つ指ついて「遠方からよくいらつしゃいました。どうぞお上り下さい」と出迎えた。

母は私の祖母ともとても仲が良く、季節毎の行事や来客時には料理や和菓子作りの段取りや手順などを二人で相談し乍らやっていた。

母が45才の時に父は48才で病死。祖母亡き後も父方の親戚の人達が母を慕ってよく会いに来てくれた。そんな母はコロナ禍一年目の2020年12月に92才で死亡。都市部ではコロナがどんどん拡大中だったが地方ではまだごくわずかの時期。そのためきょうだいからは帰省を断われ、一周忌にもコロナ蔓延でやはり帰省出来なかった。

私は母の死を実感出来ず泣いてばかりいたが三回忌にはやっと帰省しお墓参りも出来て私の心の中でひと区切りつき落ちついてきた。

私は今74才。夫は病死して早や26年が経つ。息子

二人は共に最良の伴侶を得て各々、子供にも恵まれてみんな健康で仲良く暮らしている。私は長らく一人暮らしだが健康に感謝しつつ沢山の友人にも恵まれて趣味や旅行、ボランティア等に忙しい日々を送っている。

今の幸せがあるのはいつも優しく笑顔を絶やさなかった母、たっぷりの愛情をシャワーのように注ぎ続けてくれた母、人間としてとても大きな母の存在があったからだと思う。

母は口グセのように言っていた言葉を実は自分にも言い聞かせていたのではないだろうか。そしてこのプラス思考で人生のあらゆる荒波を乗り越えて来たのだろうか。

母は自分のうしろ姿を通して生きる道しるべを私達子供に示して口グセの言葉通りに体現した偉大な人。

母の真の強さとしなやかな生きざまを想う時、今でも溢れる涙とともに、慈愛に満ちた眼なざしと母の口グセの言葉はずしりとした重みと輝きを放って今も私の胸の奥でこだましている。

もう帰ろうよ 秋

相州 散人

はじめて俸給がもらえるようになったとき、大きなウーファアの付いたコンポを買いました。もう半世紀以上も前のことになりました。そのとき選んだLPレコードはブラームスの弦楽五重奏曲でした。わたくしのクラシック音楽の好みは、秋の森のなかの小道をたどるような情緒であると知りました。

随筆を書くころとしますとすぐに秋を思い浮かべます。それは秋の深まりゆく風情に惹かれるだけではなく、七十年前の秋の深夜に母と永遠の別れをしたという重大な契機がからんでいるのだと気づきます。

長生きするつもりもなく今に至りました。そうになったのは何ごとも自分の努力によって究めることなく、人さまの後から見よう見まねで無理をしないで生きてきたからであると思います。それを運根鈍と言った人もいますが、わたくしの場合はまだことに

お恥かしいかぎりですが、単なる怠慢でした。

それにもかかわらず今なお生きていられるのは、女性たちがわたくしを大事にしてくれたお陰だと思っております。最近俳句に興味を持つようになり、或る秀句について牽強附会の言を為すの類の随想を書いて、母性に脱帽という結びにしました。それも幼い頃からの母の記憶に見守られ、励ましを受けているのだと、わたくしの人生観を吐露したのでした。なにごとも功罪半ばするものであり、そこには母によつて植え付けられた万能感とその罪過とも言うべきものがあると承知しております。

「もう帰ろうよ」という随筆を『文芸ふじさわ』に載せていただいてから七年経ちました。それを執筆した頃を振り返りますと、子どもたちが成長して家を出たから家内と二人きりの人生になったとか、或るとき「もう帰ろうよ」と家内に言葉をかけた自分自身の声にわたくしを幼時へ退行させるようなものを感じて、このようにして自分の人生は締めくくられてゆくのだとしみじみとした、と書きたかったやうでした。

そして今は、わたくしに尽すために生れてきたか

名古屋だつちや

高橋章夫

名古屋は首都でもないのにわたしのなかでは、非常に大きな関心を寄せる街に他ならないのだ。

実質的な広さもあるけれど、日本人特有の気質によくあてはまっている。例えばイタリア人はパスタにあんかけを入れないだろうし、欧米の人はトーストに小倉あんを乗せないだろうから日本文化はクリスマスとかバレンタインデーとかにも寛容で、イスラム教徒であっても程よい距離でヒントをくれる。

わたしは地元民ではないので、その問題には答えることが出来ないが、中心部の名鉄名古屋で降りると、毎日行かない人はその人の多さに驚くと思うのだが、八つもの路線が交叉するのだから当然といえは当然なのだ。さらに新幹線の停車駅ともなっていて、乗り換えやどこかの目的地に向かう人と同士、ぶつかりそうになりながら歩いている。

しばらく歩いて百貨店の方に出ると、ネット

のような人生になっている家内に、如何に応えるかと腐心するほかには実効性のある行為をわたくしは為し得ないのだという思いを記さなければならぬなりました。

ここで本当は何を表明したかったのかと振り返りますとき、わたくしが言葉に出そうとする衝動は何であったのか、ということに逢着しました。述べ立てる言葉の傍らに真実があるのであり、言葉はもろもろの情感に付きまとわれているから、なかなか本当のことが言葉になり難い、迂闊に真実を語ってはならない、わたくしはプロの物書きではないのだ、という認識に至りました。

ファウストを読み返して、わが人生の秋も深まっているのに何事かと、溜め息が出ます。

ニユースでも有名になった「ナナちゃん人形」が見えてくる。巨大な人形だけに様々な人の思いが込められているような表情をしていて間近で見ると、ホッとするのだ。

いつだったか中日ドラゴンズの試合を観戦する日、休憩しようと市内の喫茶店に入り、注文したら頼んでもいないヨーグルトがおまけについできて、ほっこりしたのである。名古屋の空気に誘われてお昼はあんかけスパゲティにしようか、味噌カツ丼にしようか、手の形がちよつとグロテスクな感じだが手羽先をたべようか迷うし、名古屋のラーメン屋で一推しなのが「寿がきや」さんで、濃厚だけれども爽やかな辛さが後をひいてまた食べたくなって、近場の食品売り場で寿がきやの袋麺を探しに行くのだ。ふくろを抱えて夕暮れの町を歩いていると、博多とか、大阪等の大都市を思い出す。コロナ騒動が全世界を覆って世の中のあらゆる事がひっくり返った世の中で、恐ろしさのあまり引きこもりになって都市そのものがゴーストタウンみたいな感じになってしまつて、「この世の終わり」かと思えるほどに大変化に驚いたのである。マスクや体温計がごっそり売れ

た。それこそ生まれて初めての体験である。

わたしも地方に足を延ばして旅行する人が少ない時期だったが、神社に参拝することがとても意義のあることというのが、当時はあまり声に出して言えないことだったが、わたしには必要なことだったのだ。引きこもりの人を見ると哀しくなる。全国の学校でも、登校せずにオンライン授業が主流となってしまった。会社等でもズーム会議とか、メールでのやりとりがコロナから身を守るひとつの方法と言われた。益々人と人が優しく接することが難しい時代になった。それよりは自分に優しくなりたいたいものだ。

図書館徘徊

竜田孝則

受付カウンターで手続きをすませ、何やらいわくがあるという鉄の階段を地下書庫へ降りていく。目的のフロアの踊り場には、薄明るい照明がついて

いる。その先には、暗闇が口をあけていた。一歩足を踏み入れると、古書に特有の一種かび臭いような香りにつつまれ、自分のいるブロックだけが点灯する。視界は、明かりが届く範囲だけだ。あとは漆黒の闇に沈んでいる。歩を進める度に点灯し、通り過ぎたところは、間もなく消灯する。目的の書棚に到達し、書名に見入っていると、突然消灯した。動きが感知できないからだ。突然、視界を奪われると、一瞬、自分が書庫のどこにいるのか分からなくなる。とにかく広い。しかし、見渡せないため、全体のイメージがつかめないのだ。体育館くらいはあるのだろうが、壁面が見えないため、正確には分からない。身じろぎをすると、瞬時に点灯するが、出入口から離れた所にいると、位置が分からなくなる。そこで闇雲に動き回ると、ドツポにはまる。それこそ彷徨するしかない。

が、救い主は必ず現れる。時折現れる図書館員だ。図書館員の移動にしたがって、光のブロックが跡を引くように移動してくる。そこで、出入口の方向も分かるというものだ。

その日も、資料を探して書庫をあてもなく徘徊し

ていた。ふと、興味深い本を見つけ、床に座り込んで読みふけていると、いつものことではあるが、

明かりがふっと消えて闇の中に取り残されてしまった。闇の中でかび臭い香りに包まれていると、あ、こういうのいいなあ、としみじみ思ってしまった。そんな思いにふけていると、思いもしない方向から、光の帯が近づいてきた。

「いかなぞ、これは。これじゃあ、闇に潜む怪人になつてしまふじゃあないか」

急いで身じろぎをしたが、なぜだか点灯しない。気持ちにはあせるがどうにもならん。こいつは困った。

光はどんどん近づいてくる。すぐ隣のブロックまできた。だが、なぜか私のいるブロックは点灯しない。

もうだめだと思つたとき、誰かが私の横をふつと通り過ぎていった。かすかにダンヒルの香りがした。

この香りには覚えがあった。同じ製品でも、つける人によって香りが違ってくるものなのだ。そう、この香りを嗅いだとたん、T山さんの面影が「(注)ふいにむせびあげるようなつかしきで胸をおそつてきた」。そう、T山さんは、先年他界したのだった。

あ、もう二度と会えないのか。亡くなる、という

のは、こういうことなのか。

ふと、亡き母タマエの句が思いうかんだ。

「失ひし 日々なつかしや 春の雨」

だけどころか、人は亡くなつても、いろんな形で残るものなのだなあ、とも思つた。

(注)瀬戸内晴美「京まんだら」(下)
312頁から尊敬をこめて引用。

「教団の解散命令請求に於ける懸念」

富安 千鶴子

安倍晋三元首相が山上徹也に殺された。そして、「統一教会」がクローズアップをした。現在名称は「世界平和統一家庭連合」となっている。

国家は解散命令を法的に裁判所に請求した。しかし、これでよいのだろうか？過去にオウム真理教と明覚寺が、解散させられた。

だが、オウム真理教は、地下鉄サリン事件、弁護士一家殺人事件、公証役場所長殺人事件、数々の事

件を起こしたが、法的には解散になったが、宗教の自由とやらで、「アレフ」、「ひかりの輪」、「山田らの集団」と後継団体は構成員をもち生き残っている。明覚寺もしかりだ。

弘法大師空海といえはオールジャパンの神聖なる和歌山県高野山で、明覚寺は詐欺事件をおこした。法的には解散となったが、結果は宗教活動を一部している者がいる。要するに、解散とは法的に税金支払いの優遇を無にするという限定的処置だけであるのだ。

考えれば、考える程おかしい。霊視、靈感商法、占い、先祖供養、健康食品、経典、仏像、壺、等々を超高価なる金額で売りつける。更には献金を超高額にさせるのである。

おまけに、目をつけた、田地畑を根こそぎ、個人信者から取りあげる。念書は、当然のことながら、すすんでの献金だとする。

悪質である。うさんくさい教えを、疑ってみなければいけないと私は思い、めぐらすのである。宗教、信仰とは、人間を大きく支配する怖さがあると思うのだ。この「世界平和統一家庭連合」(旧統一教会)

てられる様全力を注いでほしい。自民党は選挙票ほしさに、拡大を招いたのだ。幕引きは許されない。徹底的調査で疑問を解明してほしい。私は今後注視していきたい。

宮前の市民農園で野菜作り

中 岡 裕 志

今借りている宮前の市民農園は、J R東海道線の新駅予定地にある。

「湘南アイパーク」のバス停でバスを降りる。東海道線路下のトンネルをくぐる。出ると湧き水の水溜まりがある。以前は、ここで子供達が「沢蟹」を捕まえて遊んでいた。「不法投棄禁止」の立て札が立つてからは遊ぶ子供もいなくなった。

五十坪の田んぼから、一斉に、三十羽ほどの雀が飛び立つ。この田んぼは、春先に、おばあさんが腰まで浸かって稲の苗を植えていた。今年も豊作で

の問題は、解散命令だけですませてはいけない。長年に渡り、自民党、岸信介元首相と、文鮮明教祖が手を握り合い、密接な関係を築き、保持し続けた、どす黒い闇は、深すぎる。首相が合意をし、会合出席をすれば、教団には、「お墨付き」を与えてきてしまふのだ。教団の力が、選挙の力と重なっていったのだ。民主主義の根幹にか、わる重大な疑惑をまねいているのだ。

自民党の中央、地方に至る議員がとりこまれていたのだ。政治家の責任は重い。先日、言論の府の長として、細田博之前衆院議長は、説明責任も果さぬま、健康を害したとの理由で、議長をやめた。岸田首相も、自民党も擁護し続けている。会に出席して、相手へのリップサービスで、「安倍首相に、今日の会の事をすぐに報告するといった」との弁は、私達国民に対して、まったく無礼なる行為であると私は思うのである。解散命令を法的に請求したからといって、これで終了は許されない。説明はこれからだ。説明しなければ被害者救済にはならないのだ。正体を隠し勧誘は百数十件に達しているのである。裁判所は、教団の財産の保全をし、被害者救済にあ

ある。

株式会社神戸製鋼の右側に市民農園がある。この市民農園は、一区画・二十平方メートルの畑が六十七区画ある。私はその一区画を借りている。

今収穫しているのは、オクラ・ナス・ピーマン・パプリカ。十月には、落花生が採れそうだ。白菜・レタス・カリフラワー・芽キャベツは、苗を植えたばかりである。

今日は、ホウレンソウと春菊のタネをまいてきた。タネとタネの間を一センチメートル程度にすじまきする。水をたっぷり与えた。

野菜を育てる楽しさは、収穫の喜びにある。土づくりから始めてその時々々の追肥・水やりを欠かさず行くと良く成長する。

私は「少量多種」を心がけている。

右隣のAさんは、山形県出身。左隣のBさんは、介護士をしているらしい。

帰りは、地層のある鎌倉道を歩き、裏山から入り「宮前御霊神社」をお参りする。

宮前御霊神社は、天慶三年(九四〇年)村岡城の平(村岡五郎)良文が、甥の平将門の討伐と国家安

穂を祈願して山城国洛中（京都市上京区上御霊前通）の御霊社（祭神早良親王）を勧請したといわれている。

のちに鎌倉権五郎景政を合祀した。

その後正嘉年中（一二五七から五九）北条時頼の命により葛原親王、高見王、高望王を合祀し五座となった。

数ある境内社の中に「疱瘡神」がある。

鎌倉権五郎景政が勧請したという。

平安時代の「続日本紀」によれば、「疱瘡は天平七年（七三五年）に朝鮮半島の新羅から伝わったとある。

当時は外交を司る太宰府が九州の筑前国（現・福岡県）筑紫郡に置かれたため、外国人との接触が多いこの地が疱瘡の流行源となることが多く、太宰府に左遷された菅原道真や藤原広嗣らの御霊信仰とも関連づけられ、疱瘡は怨霊の祟りとも考えられ恐れられた。

参道沿いに、Hファームがある。

春になると、Hファームのイチゴの直売が始まる。みずみずしくて甘い。楽しみである。

て仕方がありません。

桜が散り葉桜となり、初夏を迎えてもウグイスは鳴き続けます。この頃には鳴き方は、はつきりと「ホーホケキョ」と聴こえるようになっていきます。

今年の猛暑の中でもウグイスは、セミと共にお盆過ぎまで鳴き続けていました。その澄んだ鳴き声に癒され、一時でも暑さを忘れることができました。

ウグイスは、一体いつまで鳴き続けるのでしょうか？秋になると他の場所に移動してしまうのでしょうか？

ネットで調べてみると「ホーホケキョ」と鳴くのはオスのみで、パートナーとなるメスを得て、子育てを始める八月から九月頃までこのさえずりをするそうです。その後、秋から冬にかけては、ほぼ同じ場所でオス、メス共に、「チャッチャ」と鳴くとのこととです。ということは、今でも近くにいるのかもしれない。

しかし、ウグイスの姿すら見たこともなく「チャッチャ」の鳴き声を聴き分けることもできません。今はただ来年の春まで元気でいてほしいと

市民農園は、おじいさんやおばあさんの憩いの場所なのである。

桜とウグイス

ネ コ ス ケ

今年の桜は、異例の早さで開花しました。コロナ禍で自粛していたお花見も徐々に解禁され、桜も一日でも早く咲きたかったのかもしれない。

桜が咲き始めると、冬の間は控えていた引地川親水公園の早朝ウォーキングを再開します。以前お会いしていた方達とまた一緒に頑張ろうと、元気を頂く季節の始まりでもあります。

私の家の東側にも桜の木があります。ちょうどこの頃、近くでウグイスのさえずりが聴こえ始めます。冬が苦手な私にとって、桜とウグイスは春の訪れを知らせてくれる嬉しい存在です。

春先のウグイスは「ホーホケキョ」と上手く鳴けずに練習しているようですが、それがまたかわいく

願うばかりです。

そしてもう一つ、春先に上手く鳴くことができない訳は、ノドの筋肉が関係していることが分かりました。

それは暖かくなりノドに筋肉が付き、練習を重ねてようやくあのさえずりができるようになるからだと思います。

ウグイスもよいパートナーを見つけて、子孫を残すため努力をしているのが分かると、来年の春先の鳴き方がより一層、愛らしく聴こえてくることでしょう。

フィットネスの生活化

長谷川 ドリー

1964年東京オリンピック前後に社会体育指導に専念した頃、フィットネスという目新しい言葉が北米から導入され、その未知の概念に戸惑いながらも新たな興味を覚えていた。その後、シカゴイン

ター留学の機会が与えられ、当時フィットネスの実践活動を展開していたシカゴ市内17のYMCAで多様な研修を受けた。その節、第二次世界大戦終了直後に運動生理学者のクラウス・ウエーバー両博士が、戦禍で破壊され尽くし劣悪な生活環境で暮らすヨーロッパ各地の青少年の健康実態調査で基礎体力テストを実施した。現地の子供達は食糧不足の中で通学のため瓦礫を越え、否応なく長い距離を往復し、日々の生活を通して必然的に身体活動を余儀なくされ、その結果、自然に身体的負荷が継続され、体力テストでは予想外の93%の高い成果が現れた。次いで調査団が戦勝国の米国の青少年でも同じ体力テストを実施した結果は、高度な生活文化を享受し、飽食と運動不足と肥満による体力低下していた米国の青少年は僅か43%しか成功しなかった。この調査結果がアイゼンハワー大統領に報告され、未来の国防を担う青少年の体力低下の実態に憂慮した大統領は直轄の体力強化対策を組織化し、伝統的なバスケットボールやバレーボールを生み出したYMCAに青少年の体力強化事業が委託され、1950年代に全米にフィットネス運動が組

織化していったことを知った。国際的にも1960年代にはミュンヘンオリンピックを契機にトリム運動として、国民の体力づくりが急速に拡大していった。日本でも東京オリンピック直後に国民体力作り審議会が組織化され、それまでのエリートスポーツ観戦のみの受け身状態から脱皮して、自己参加型の社会体育が急速に広がり、ジョギング、テニス、スキー、水泳、ヨガ、エアロビクス、サイクリング、フラダンス、などがブーム化し、都市部には新たなフィットネスジムが続々と開設され、健康文化を取り込んだライフスタイルが定着してきた。私は1970年にフィットネスの起業化を試み、いつでも、どこでも、誰でもできる健康づくりの出版を始めた。エプロン姿で参加できる身近な場所でも、体力作りを求める人々に専門指導員を派遣するというシステムを構築した。昨今の社会構造の変革でデジタル化が先行し、インターネットを通して多彩なスポーツ文化がSNSに流れサポーターの熱狂的な興奮が毎日のように伝わってくる。ただ観戦の興奮を生かしながら、同時に個々人が積極的な健康作りに結びつき、個別の身体機能に応じた

フィットネスを生活化され、より良い健康生活文化の維持改善に結びつく契機となることを願っている。健康は全てのものから自由で、いかなる規制や拘束も受けず、揺籃から墓場に至るすべての人々が、たった一度の人生を完全燃焼するために、多様な暮らしの中にフィットネス活動を取り込んで欲しいと願っている。

「行く雲の」

畑 昌子

ゆく雲の行方は知らず一葉落つ 昌子
「文芸ふじさわ」のおかげ様で心の向くまゝを書き記すことが出来る。

今生も又戦争、人の殺し合い、欲の張り合ひ。まったく心の置き場のない日々である。

——。私の小さな畑では茄子、ピーマン、コスモスは好き勝手に咲いている。青菜があちこちに——。何といい加減な畑だろうか？それでも燦燦と光輝く

風の中倒れるまゝに咲き、実り、種茄子の隣りに小さな茄子こなすを連れまだ青々と花を付けまだ頑張れますよと語っている。草を払えば去年植えた芹が畑を占居している。「これもかわいい戦争ね。」空にも地にも愛すべき神は在します。
なんといい文化の日だろう
人々が何が大切かをわすれないよう

ちゅうちゃん第5話カブトムシ

ハムスター

(創作絵本の会「えほんだな」)

ある夏の日、正義の味方、町の人気者、ノラ猫ちゅうちゃんが町を歩いています。ネズミみたいな名前だけど猫なんです。ちゅうちゃんは人間とお話しができませんが、動物とお話しができます。

「今日は暑い。今までで最高に暑い。暑いと言わないうようにしよう。でも言っちゃう。暑い、暑い。水を探さなくちゃ。水、水。」

そうだ、3丁目のあの娘のところがいいな。いつもきれいな水を洗面器に入れて置いてくれるもんね。おや？先客がいる。ハチさんだ」

「あれ、しまった。助けてー」

ハチは水を飲むとうとして、洗面器に逆さまに落ちて溺れています。

「あつ、ハチさん大丈夫？いま助けるよ。ほくを刺さないでね。」

もう大丈夫だよ」

「ありがとう。ちゅうちゃんは命の恩人です」

「いたっ」

「ご免なさい。つい癖で刺しちゃった」

「いいよ、いいよ。気にしなくて。これくらい。」

洗面器の水をこぼしちゃった。やれやれ、水を飲みそこなった。

他を探そう。あつ、あそこに池がある。暑さで干上がってるぞ。

水は底にちよつぴりだ。しまった、わーっ」

ちゅうちゃんは池に転げ落ちていきました。

ザブーン。

「でも大丈夫。やつとこさ水が飲めた。」

た。ちゅうちゃんは撫でられるのが大、大、大好きです。

まぼろしの林田金作蔵書印文庫

林 田 繁 雄

子供の頃を振り返り、あれは、何んて恵まれていたのだろうと思うことがひとつある。

世界文学の「ベニスの商人」「罪と罰」「ファウスト」を10歳の頃には、読み終えていた。いえ、自慢話ではありません。マンガです、手塚治虫の漫画で読んだのです。

マンガかよつですつて。小松左京氏に聞いてみましょう。

「プールの『失われた時を求めて』の翻訳が完結した時に、しきりに僕が、感心すると、星新一がこう云った。

『べつに今読まなくても、いずれ手塚さんがマンガにしてくれるよ』『けだし名言』と僕は膝をたたいた

あれ？背中に何か固いものが。わーっ、大きなカブトムシのはりぼてだ。ずいぶん長く池に沈んでいたんだね。だいぶ錆びてる。

でっかい落とし物だ。重いぞ重いぞ。よいしょ、こらしよ、どっこいしょ」

ちゅうちゃんは大きなカブトムシを背負つて池から引き揚げます。

「わあつ」大きなカブトムシが現れたので子供を連れられたお母さんがびっくりしています。お母さんからはちゅうちゃんがカブトムシに隠れて見えません。子どもはちゅうちゃんがしっかり見えているのでニコニコしています。

「落とし物を交番に届けよう」

今度は、交番のおまわりさんがびっくりしています。

「何だ、何だ？」警棒と盾を構えながら、

「怪獣、おとなしくしろ！

なーんだ、ちゅうちゃんか。怪獣かと思ったよ。カブトムシの落とし物を拾ったのかな？これから落とし主を捜してみるよ。お手柄、お手柄」

おまわりさんは、ちゅうちゃんを優しく撫でまし

ものである。」

昭和二十年代からの初期作品、例えば、鉄腕アトムの誕生物語「アトム大使」、逆立てた髪もりしい「リボンの騎士」続編「サファイア姫」。

SFなら、「ロストワールド」「メトロポリス」、面白い上に、ぎなた読みを子供に教えてくれた「弁慶」(スマホで調べて下さい)。

時代劇なら「丹下左膳」。後年、山中貞雄の傑作百万両の壺を観た時に、左膳の大河内伝次郎が、マンガそのものでした。いえ、手塚が10歳で観た映画を原作に描いたのです。

もちろん「ジャングル大帝」も「Oマンも」。

その数、百数十冊が同居していた叔父さんの書庫に並んでおり、何時でも勝手に読めたのです。「火の鳥」だけを誉めちぎる人がいても、何時も静かに聞いていたものです。

叔父さんは人形劇、指人形作りの資料として、マンガを集め始めたのかもしれないが、手元に残すのは、手塚マンガであり、他は人に与えてしまう。

実家に車で寄ると、箱一杯のマンガを何時も持たされるものだから、一度だけ大好きな「Oマン」をね

だったことがある。渡された本には、手元に置くべき本の証しとなる林田金作蔵書印が押されていたのがうれしかった。懐かしい。

叔父さんの容態が悪い、癌で、ひと月持つかどうか、と連絡を受け、車を飛ばした時には思い出がふれて来ました。

学校から帰れば、叔父さんの指人形作りの傍らで、一日中、漫画を読み耽っていたこと。

そうだー漫画だ。こちらも五十を越えて、久しぶりに、叔父さんの蔵書印の手塚漫画が頭の中いっぱい広がった。

私も、後から手塚マンガを全集で揃え出しましたが昭和20年代の単行本は、紙質は悪いが手がこんでいる。インクの赤いページがあれば青もある。総天然色ページが挿まれる。

あの百冊余りの漫画を大事にしくちや、独身だったから、引き継いであげなくちゃと思うと、体が熱くなりました。

叔父さんが亡くなって、部屋をいくら探しても、漫画は、人形までも見つかりませんでした。果然としました。私には幸福な思い出があると立ち直るま

で、随分掛かりました。

I LOVE FUJISAWA

堀井 寛

境川の大道橋とクリスタルホテルの近くにある東恩田公園の前に建つ14階建のペランダが公園に面したマンションの6階に住居して25年になる。

公園にあったいづれも直径1メートルに近い桜の大樹7本のうち6本が根元から伐採され閑散とした感じになってしまったが、幼稚園児のにぎやかな遊び声が聞こえ、盆踊り、餅つきが催され住民から親しまれている公園である。

北陸の金沢、四国の高知市、都内の洗足、西小山、巢鴨、小金井、池上、神奈川の鎌倉雪の下、大磯、梶原、インドのカルカッタ、アメリカ西海岸のロスアンゼルスと数多くの地で住んできたが、藤沢は住めば住むほど好きになる街である。

東京駅、新宿駅まで50分少々、片瀬江の島駅には

7分で到着である。

小田急百貨店、さいかや、ビックカメラ、ドンキホーテ、名店ビル、安売りのオーケーは徒歩3分と買物が便利である。

四川料理の星都の麻婆豆腐、千里の蒸し餃子、甚五郎のランチ、フランス家庭料理のラ・シャンブル、銀座通りのイタリアン“アンチヨビ”名店ビルの“海のカレーライスはやみつきになる。少し離れた本町郵便局に隣接の“松之屋”の鳥がらスープラーメンは、これぞラーメンという絶品である。

江の島々内のイル・キャンティカフェのスパゲティーは、真夜中のスパゲティーというしゃれたメニュー名である。

江の島々内にある井上ではその日の朝取れの魚をランチで出してくれて美味しい。

市役所玄関口で湘南野菜のキャベツ、トマトの販売が行われている。

片瀬漁港と周辺では、大きさ7cm以上の湘南はまぐり、しらす等の魚貝が買えるのもよい。

西浜では年に一度誰でも参加出来る地引網があり

取れた魚がもらえる。

日大、慶応大学湘南藤沢キャンパスを含め4つの大学がある学園都市でもある。

秩父宮体育館、湘南台文化センターでは質の良い演劇、歌謡などが年間を通して催され文化度の高さを示している。

藤沢は湘南の中心地であり、気さくで、ちよっと気の利いているのが藤沢人の特徴であろう。

江の島々内の天然温泉スパで浴槽に浸りながら眼前に広がる絵巻物のような相模湾と雄大な富士山を眺める……こんな贅沢も藤沢に住むおかげと感じる……一瞬ひとときである。

その時代の流行りもの

松本 実知子
(てっせん)

時は一九五八年、兄が中学生、私は十一歳の小学生で弟は一年生だ。乾麺の「チキンラーメン」が発売された。どんぶりに乾麺を入れ、熱湯を注ぎ数分蒸らせば食べられるという画期的な商品だ。子供たちの好奇心を誘うインスタント食品の登場である。早く食べたいと、どんぶりのふたを開けるのを待ちかねる我々兄弟の顔が見えるようだ。今ではカップ麺が主流だが、スーパリーの棚には袋入りの乾麺もある。買うことはほとんどないが。

次に思い出すのは「少年マガジン」だ。弟が読んでいた漫画雑誌である。兄や私も、毎月「少年」「少女」等の雑誌を各自一冊買ってもらっていた。しかし、弟の年代になると週刊誌、あるいは月二回発行の雑誌へと変わっている。何と無くだが、弟の頃から時代が変わった印象がある。因みに兄の愛読書で

インドウズ98からだ。

いまだにパソコンを理解しているとは言えないし、最初はネットという概念が想像できなかった。スマホも使いこなしているとはとても言えないが、無くてはならない存在になってしまった。

後期高齢者の今、昭和、平成、令和と振り返れば覚えきれない程多くのことがあったのだと、感慨深い。しかし、この変化のスピードについていけないと、努力を放棄することはできないのだろう。後は進化したAIが、親切に手引きしてくれるようになるのを待っている。

この街に住んで

儘田 加寿子

はじめて、東海道線の辻堂駅から、バスに乗って、トンネルを抜けると、景色が一変し一面に団地が広がり、驚きました。

上越新幹線は、トンネルを抜けると、雪国であっ

は鉄腕アトム、弟のマガジンではゲゲゲの鬼太郎、巨人の星が印象的だった。何故か、自分用の少女漫画の内容は忘れてしまった。

次の流行りものにはミニスカートを取り上げよう。私が就職し、服も自分の給料で買えるようになったころだ。人気モデルのツイイギーの来日でブームは盛り上がり、佐藤栄作首相の夫人まで渡米時に着用したと話題になった。

次の思い出は、任天堂のファミコンだろうか。ドンキーコング、ドラゴンクエスト、スーパーマリオ等だ。長女が五年生で長男が幼稚園児だった。娘の方は周囲の子供たちがやっているからやってみようかという程度だったが、息子の方はそれからどっぷりゲーム漬けとなってしまった。特にストリートファイター等の格闘ゲームには熱中していた。

スーパーマリオの人気はそれから長く続いたようで、二〇一六年のリオオリンピックの閉会式に、安倍首相がマリオの衣装で登場し世間を驚かせた。

時代は移り、今では流行りということを超えてパソコンやスマホの使用が当たり前になってしまった。確か、我が家にパソコンが登場したのはウ

たが、ここは、団地だねと息子と話しながら、丘陵地帯に広がる、たくさんさんの団地に壮大さを感じました。

「お母さん、湘南に住んで、みようよ。なんとなく、湘南は開放的だし、空の色の青さは、ロサンゼルスのように青いし、海も近い。風も涼しい風が吹くから、ぼくはこのエリアに住みたいなあ」と言いました。

外に出れば、晴れた日には富士山と大山が見え、春には、ウグイスの鳴き声にききほれ、今までと、ちがった環境にも、興味がわきました。

そして、藤沢に引越してきました。
今では、永く住んでいるような気がします。

毎週、木曜日の朝、開催されている「公園体操」に夫婦で参加しています。そこでのおしゃべりは、楽しいひとときです。

「ちよいいと鎌倉へ」

夢 実 香

まるで自分の住む町のように鎌倉を闊歩したいと最近考えるようになった。コロナ禍で不要不急の外出制限が出された時に、父のお墓があるからという理由で鎌倉ばかり出かけた。それまでも鎌倉は身近な場所だったが、見え方感じ方が違ってきた。

生前にこの地にお墓を選んだのは、父なりの理由があったそうだ。春には桜が咲き乱れ気持ちよく訪れることができ、お墓参りの後は鎌倉散策ができるように皆がお墓参りをしやすいように、と考えたのだと母から聞かされた。そしてまったく父の思惑通りになった。大船駅で横須賀線に乗り換えて鎌倉駅で下車。そこからバスで霊園に向かう。お参りが終わると、バスには乗らずに歩いて鎌倉駅まで戻る。途中に杉本寺、報国寺、浄明寺などがあり散策には事欠かない。古民家を改築したレストランやカフェも多くあり、私にとって心も体も満喫できる場所にな

なっている。

特にいま夢中になっているのはハイキングコースをめぐることである。三方が低い山に囲まれた古都鎌倉。鎌倉ハイキングコースは四季折々の表情でハイカーを楽しませてくれる。ハイキングコースの途中に切通があつたり、歴史に触れる石塔ややぐらに出会えたりもする。大仏・葛原岡コースは大仏切通、化粧坂切通があり源氏山公園、源頼朝像を訪れ縁結びの葛原岡神社がある見どころ満載のコース。急な石の坂や滑りやすい箇所もあるが、初心者でも十分に歩けるコースだ。昨年惜しくも閉店した天空のカフェもコースの途中にあり、何度か足を休めた。天園コースは明月院横の道から、建長寺から、瑞泉寺からの入り口といくつもの入口があり何度でも楽しめる距離のあるコースだ。紅葉の季節は、圧倒的な紅葉に埋もれて歩くことができる。ハイキングコースはいくつもあるが、台風の影響により倒木や地滑りで通行止めになることもあり、出かける前にはよく確認が必要だ。今年四月に通過再開となった祇園山コースを楽しんだ。東勝寺跡、北条高時腹切りやぐらから八雲神社までの比較的短いコースだ。現在

も通行止めの釈迦堂切通の再開が待ち遠しい。

歴史的な側面でも鎌倉は面白い場所なのだが、にぎやかな町の中からスツと自然の山の中に入れる不思議さと、古い時代に思いを馳せて自分がどこに生きているのかわからなくなるような感覚が好きなのかもしれない。コロナ禍であつてもここではマスクを外して、思い切り緑の空気を吸い込んで元氣を取り込んだ三年間。今は普通に山登りも行けるようになったが鎌倉ハイキングは定期的に行っている。いつ行つても楽しいからだ。もちろんお墓参りもかささない。

では本日もちよいと鎌倉へ。

父の五十回忌

森 眞 彦

四月末頃に神戸に住む兄から、亡父の五十回忌の法要を時候のよい五月二十日に行いたいという電話があつた。両親の眠るお墓は、四国は香川県の丸亀

市にあるお寺の中にある。兄と妹は八十歳前後になるが、甥と姪を含めて七人参加する予定という。みんな神戸の近くに住んでいるので日帰りできる。私の方は日帰りは無理なので一人で参加することにした。最寄りの東海道線辻堂駅から丸亀駅までJR線を乗り継いで六時間位かかるので、二泊三日の一人旅ということになった。前日の朝に辻堂駅を出発して、過去に住んだことのある京都、大阪、岡山を経由し、瀬戸大橋を渡って丸亀駅に到着したのは夕刻であつた。

丸亀は築城四百余年の丸亀城を中心として、かつては大いに賑わっていた歴史と文化の薫る町である。生後十年間住んでいた我が故郷である。生まれた家は古い落ち着いた住宅街の中にあり、両親の眠るお墓はすぐ近くのお寺、本行寺にある。久しぶりに生家のあつた街を歩いてみると、かつての住宅地が空き地になったり駐車場になったりしている。お寺の方も無縁のお墓が多くなっているようだ。ふと、お釈迦さまが遺された「すべては移りゆく。怠ることなく努め励めよ」という言葉が思い起こされる。

みんなが揃ったところで五十回忌の法要が始まった。まずは本堂でご住職の読経を聞き、みんなで焼香した。それからお墓の前に集まって法要を続けた。その後、お昼は揃って丸亀名物の骨付鳥を味わい、懐かしい町並みをみんなで歓談しながら散策した。ほんとうに久しぶりの楽しいひと時であった。

翌日は丸亀から再び瀬戸大橋を経由し、帰途についた。車中、いろんなことが走馬灯のように浮かんでくる。

戦後、核家族化が進み、地縁血縁関係が薄れてきた。そして少子高齢化や人口減少、都市部への人口集中が加速した結果、お寺の檀家の減少が進み、今あるお寺もかなりの数の消滅が予測されている。

今の日本仏教は「葬式仏教」と言われ、あたかも死者を供養する宗教のようになっていく。私たちにあって、お寺のご住職と話をすることは葬儀と法要以外には殆どない。

お釈迦さまはその当時、修行者に対して「自分の遺骨の供養に拘わりを持つな」と言ったと伝えられている。お釈迦さまは一貫して、この苦難に満ちた

人生をいかに生きるべきかを説いておられた。日本の仏教も「葬式仏教」だけでなく、人々の悩みや社会の課題に答え、幸せになるための教えを説くという本来の役割を取り戻し、そして、お寺やご住職にも「道を示してくれる」といった期待に答えてほしいものである。

などと、考えているうちに辻堂駅に降り着いた。縁者とも会え、楽しく一人旅ができたことをありがたく思っている。以上

藤沢宿ってどんなところ？ (江戸時代にタイムトリップ)

山下 一馬

東海道五十三次、江戸の日本橋から京都の三条大橋まで124里8丁(487.8km)に53の宿場があった。藤沢宿はその6番目の宿場で、江戸時代にお伊勢詣で東海道中で宿泊していた。選ばれた村人が旅費を集め、数か月かけて伊勢詣でしていた

が、むしろ3泊4日で行ける大山、江の島詣が盛んだったようだ。日本橋から保土谷宿まで約9里あり一日に歩ける距離を考えると「ほどよい」この辺りで宿を取るようになる。頑張って権太坂を上っても1.3里先の戸塚宿に「とっ捕まる」と言われていた。大山詣の目的は「五穀豊穡」、鎌倉時代には頼朝が刀を奉納して文武長久を祈願したことから、長い木刀を奉納することもあった。ルートは幾つかあり、戸塚の不動坂から長後宿に行き、そこから大山詣でした。帰りに藤沢宿で一泊し江の島詣をする。藤沢宿は江戸から近い場所として人気があり、また交通の要所で遊行寺前を東に向かう鎌倉道、北へ向かう八王子道(滝山街道)、北西に向かう厚木道があった。戸塚、川崎宿以前に、1601年から清浄光寺(遊行寺)の門前町として栄えていた。東海道(遊行寺東側の江戸見附から藤沢本町を超えた西側の京見附、その間1.3kmが宿場町だ。人口4千人、総家数919軒で、旅籠45軒、本陣1軒、脇本陣2軒あった。当初徳川將軍家の宿泊する藤沢御殿があり徳川家康、秀忠、家光が1682年ころまで利用していた。江戸から旅をして来ると、江戸見附が宿

場の入り口となり、怪しい旅人はここで検問される。見附から遊行寺東側の坂を下ると有事の際、敵の勢いを鈍らせる柵形構造、防火の為の広小路にでる。大鋸橋の袂に高札場が設けられ、公定賃料(宿賃)、キリシタン禁制、走党廃止令等の幕府の重要法令が掲示されている。近辺に越前屋、角屋、正月屋、松木屋、植松屋、太和屋等の旅籠が並ぶ。諸大名、公家、幕府の重臣は本陣に泊まり、我々庶民は、米を携帯した木賃宿や食事を提供する旅籠、また飯盛女のいる旅籠に泊まる。飯盛女は当時一軒に2名まで許可された旅籠が22軒あったが、実際には107人の飯盛女がいて、遊女奉公させる風潮もあったようだ。宿場を管理する問屋場があり、坂戸と大久保の2軒が10日交替で人馬継立などを行った。人足100人、馬100頭を備え、飛脚人足の継立も担った。旅籠は高級宿で300文(約6千円)、安い宿で100文、また木賃宿は素泊まり50文に薪代もあった。食事は「一汁三菜」で焼き魚また煮魚が付いていた。境川に掛る大鋸橋(遊行寺橋)あたりに江の島の一の鳥居があり、江の島道約1里で江の島に向かう。江の島詣は風光明媚な島と富士山が望

め、海の幸を楽しみ、弁財天をお詣りする。江の島神社は江戸の親方、歌舞伎役者、花魁も訪れ、その人気は浮世絵からもうかがえる。弁天様は女性の神様なので、「男女でお詣すると弁天様に妬まれるよ?」と言って近隣の宿で遊興する輩もいたとか? それでは私もそろそろ宿をとり一杯やることにする。

「草臥て宿かる比や藤の花」芭蕉

思い出を夢につなげて

山田節子

掌に収まるほどの可愛い一刀彫の立ち雛は私の青春の思い出を秘めた宝物である。今から六十余年前、高校の修学旅行の初日に、私は奈良の老舗で二人に出会った。決められたお小遣いの大枚をはたいて買ったもので、あとの行程が少し心細かったのも、忘れることができない。白い木肌に繊細に描かれた伝統の彩りや佇まいは、あの日のまま、毎年春

の訪れを伝える役を果たしている。

コロナ禍で延期されていた同期会が四年振りに開かれた。恩師や友達への黙祷のあとは、若い頃の思い出話に溢れる会場になった。たまたま私のまわりに、二十才記念にと富士山に登った思い出の花が咲いた。それは四人で、二日がかりの挑戦だった。梅雨明けを待つて出発した五合目までは静かな新緑の美しさを楽しみ、その後は火山特有の砂利の道をひたすら登った。七合目半の聖徳太子縁の山小屋に泊り、早朝登山に備えた。(この山小屋はNHKのニュースで夏の登山開始の朝毎に私の心に思い出を蘇らせてくれている。)暗闇をついて登り始め、頂上で御来光に真向った時の感動を皆が口にして、あらためて思い出の力をかみしめたものだ。火口を降りて万年雪を沸かして飲んだコーヒーにも感激したのだが、下山の時の武勇伝こそ、同行四人の大きな宝となっている。当時富士山測候所は建設途上にあつて、工事車輛が登山道を消すほどの凸凹道だった。(スカイツリーが活躍する現代では、その施設も麓で博物館として公開されている。)私達は膝まで埋もれながら、そのルートを注意深く、五合目迄駆け

おりたのだ。ころぶこともなく無事に、麓まで林道を楽しんだことを思い出すだけでも心若返るひとときになった。

私達世代は、戦中に生を享け、物心ついた時から、国中が復興にそして更なる躍進にと、まっしぐらな社会のもとで成長し、社会人としてすごしてきた。その幸せを宝物として出来る範囲で、それを活かすこれからにしたいという思い深くする秋の午後と

最初期の新幹線

山成健治

昭和三十九年(一九六四年)十月一日、日本初の新幹線が東京と新大阪の間で開通した。その一週間後、当時、大学二年であった私は、同じクラスの仲間二人と共に、東京駅を朝九時に出発する新大阪行きの新幹線に乗車した。友の一人の郷里が松山市の郊外に在り、我々の大学が、この時期に開催された

オリンピッククの会場に使われて臨時休校となった為、級友三人で連れ立って、友の故郷・松山に出掛けることになったからである。

列車の中は、ガラガラであった。私どもの他には数人が広い車内にポツン、ポツンと座っているのみであった。私は、日本で初めて走る新幹線に、多くの日本人は興味と関心を抱いているやに聞いていたので、乗車を希望していた人が大勢、乗り込んで来るのではないかと……とばかり、思っていた。それだけに、ガラんとした車内を見た時には、些か呆気が起これば死は確実!という報道も成されていたので、暫くの間は、様子見を決め込んでいた人たちが、実際のところは一番多かったのかも知れない……。

いよいよ新幹線が走り出し、徐々にスピードを上げていくと、紛れもなくそのスピードは、異次元のものであることが、すぐに分かった。従来の特急列車であれば、猛スピードで走る乗用車に追い越されることも無くはなかったが、この列車(新幹線)のスピードはまるで次元が違っていた。乗用車が、ど

んなに猛スピードで走っているように、その乗用車が、まるで止まってでもいるかのようになり、一瞬の内に追い越してしまうからである。しかも、そんな猛スピードで走っているにもかかわらず、列車内は音も静かで、揺れも、さほど感じないのである。

予定通り、三時間十分後には新大阪駅に到着した。時刻は、正午を少し回ったばかりである。従来であれば、朝、東京駅を出発しても、大阪駅に到着するのは夕刻であったが、これからは、真昼には大阪駅に到着することが可能なのである。東京・大阪間の移動が、それまでの一日から、これからは半日で可能となったことを体験できたことは、大変貴重であった。何故なら、高度経済成長時代を迎えていた我が国において、「名状し難い何か」が、今、確実に起こっている……ことを、実験的に学ぶことが出来たからである。

予感していた通り、新幹線登場後の日本は、高度経済成長路線を「まっしぐら」に進むこととなった。

で、みんなに好かれていた。発表させて頂いた時、会議の総括をされていた森先生が、檀上から、「ヒマラヤ・ラダックまで行って、女性が、識字教育を応援することは、元気があって、素晴らしい」と、お褒めの言葉を頂き嬉しかった。

2012年、雑誌のインタビューに答えられた。「美しく老いるためにどのようなことが必要でしょうか」という問いに、「美しい心を持つこと。心を磨く勉強をしなければ、美しく老いることはできません」

「年齢を重ねて、ますます心を自在に悠々と生きておられますが、その秘訣は」

「今、心がけているのは、捨てることです。今まで持っていた価値観や物を捨てる。20年間使い続けた旋盤（工作機械）を、友人に差し上げたら、執着が消えました」

2018年「ロボット工学と仏教」を出版された。工学博士の森先生はロボット工学の先駆者であり、ロボットコンテストの生みの親として知られ、仏教にも造詣が深い。森先生は、「ロボットに対する、人間の作法、人としての心遣いや配慮、そして

ロボット博士 森政弘先生

横田 佳代子

1987年、スタンフォード大学で、国際平和会議が開催された。森政弘先生の講演が終った時、「面白かった」「素晴らしい」と称賛の声があふれた。その時のカセットテープを大切にしていたが、最近、友人達に依頼して、CDにして森先生にお届けした。

森先生は1927年三重県生まれ、小学校時代から工作を好み、中学校に入ると真空管に魅せられ、将来は電気技術者になろうと志ざした。そのため自宅に工作室を持ち、そこに閉じこもる毎日が続いた。名古屋大学に進学、1959年、東京大学助教。1969年、東京工業大学教授。1987年名誉教授。紫綬褒章 勲三等旭日中綬章受賞。

中央学術研究所で、5年ほど毎年、論文を発表する機会を頂いた。森先生に温かいご指導を頂いた。先生はいつも明るく、にこにこしておられ、自然体

ロボットから学ぼうという姿勢が必要」「ロボットにも私の命が宿っている。尊さは、ロボットも、人間も同じ」と述べられる。

2021年、お元気な先生が、テレビ「こころの時代」で、対談されました。宮崎から世田谷に転居され、整った広いお部屋で、にこにこ話される先生は、素敵でした。「仏教では自然と書いて自然（じねん）と呼ぶ。自然の状態にみんながなることが、地球が救われる元だと思います。ゲーテも言っています。「人間は大切なものを忘れている。自然に対する畏敬の念です」

森先生を尊敬しておられる恩師が、森先生のお言葉を紹介された。「ぼくたちの生命は永遠の過去から、永劫の未来へと受け継がれてゆく。宇宙の大生命そのものがぼくたちの命なのである。そして同時に宇宙の一切合切がぼくたちの親戚なのだ」心に響く言葉です。

一話一句

吉田 邦男

時雨

あれは、大学をやめて左官見習ひのやうなことをしてゐた頃だ。その日は肌寒く朝方は小雨が降つた。仕事を少しはやく切り上げ帰宅することにして、現場を片づけ、道具をしまつてトラックに乗り込んだ。エンジンをかけると、ラジオからニュースが流れて来た。『作家三島由紀夫が自衛隊の市ヶ谷駐屯地に入り、自衛隊員の決起を促したがかなはず割腹自殺をした』たしかこんな内容だつたと記憶する。帰路は市ヶ谷からなるべく遠い道を選んだつもりだったが、交通規制と渋滞に遭ひ帰宅がひどく遅れた。テレビでは早速特集が生まれ、翌日からは新聞雑誌等で詳細が報じられた。

あの日、三島は月刊誌「新潮」に連載してゐた「天人五衰」の最終原稿を書き上げ、新潮社に郵送し、「楯の会」の会員と市ヶ谷に向かつたさうだ。原稿

はきれいに清書されてゐて筆の乱れはなかつたと云ふ。

大学はやめたが、文学への思ひ捨てがたく「新潮」だけは定期購読してゐた。師走の雑踏の中にある小さな書店で、「新潮」を受け取つた。店主は『たくさん仕入れやうと思つたんだが定期のこれ一冊だけ』と渋い顔で渡してくれた。大書店が買い占めてしまつたのだらう。

三島のそれは一月号の巻頭に遺稿として載つてゐた。あれから五十余年、今年も十一月二十五日がつてくる。三島忌・由紀夫忌・憂国忌と云うさうだ。

時雨るるか三島由紀夫の後ろ影

俳句の部

堀口 みゆき

令和六年一月一日、能登半島を中心に大地震が起りました。丁度、私は近くの神社に初詣中にて境内にいと全く揺れを感じませんでした。能登方面の方々のことを思うと胸が痛みます。

大変な新年の幕開けとなりましたが、地震の句を作られた方もおられると思います。俳句の読み方には独特のものもあり、地震を「ない」とも読みますので、575の音数によつて二音になったり三音になったりと音数を作品によつて選ぶ柔軟さもありません。

さて、今回、俳句の応募数は大幅に増え、今年は一四三名の参加となりました。高齢化による俳句人口の減少が嘆かれています。他ジャンルに比べると、俳句は若い方々にも、かなり浸透してきていると思います。要因としては、高校生対象の「俳句甲子園」や「プレバト」等、テレビやYouTubeでの俳句番組からの影響もあります。藤沢市俳句協会においても、

短歌の部

原 けい子

「文芸ふじさわ」の短歌部門、これまでは長く太田博氏の編集のもと出されて来たが、この度、彼が老齢を理由に、今集以降の編集が難しいとのことで、急遽私にお鉢が回ってきた。しかし、私とて高齢、市民短歌の選者をしていた頃とは体力も気力も共に大違い。一日一日やつの思いで生きている有様なのだ。キャバシティーをすっかりオーバーすることにした次第である。だけという約束で、引き受けることにした次第である。

「市民短歌」の活動がなくなり、そのうちにコロナ流行の問題もあつたりで、私自身、個人的な会を細々とやっているだけになっている現在、年に二回行われていた市民短歌の大会の活気を懐かしく思い出している。

今回「文芸ふじさわ」への参加者は27名。それも私がかかわる短歌会の人たちに、やや強制的に出してもらつてやつと揃つた27名である。世の中進む高齢化、歌壇の世界も例外ではなく、老齢の波は容赦ない。若い人たちががんばってもらわねばとつくづく思う。先細りが目に見えている。

「文芸ふじさわ」は発表の場としてもよい機会である。短歌とは今更言うまでもないが、自分の思いを告げ

俳句を日本の伝統文化として、若い世代に引き継いで頂きたいという願いを皆、持つております。俳句が、他に比べ取り組み易いかについては、意見が分かれるかと思いますが、まず、短い言葉で表現できること。特に若年層に於て、言葉の簡略化が流行っていることも意外に関係するのではないのでしょうか？

「あけましておめでとう」が「アケオメ」「ことしもよろしく」が「コトヨロ」に短縮。本当は、もつと深いところを理解してほしいのですが、とにかく、最初は興味を持つてもらうことが大事であると思います。海外における俳句人口が増えている理由も、シンプルな表現あたりかもしれない。最初、俳句を敬遠する理由の一つとして「決まりごとが難しい」と言つて避ける傾向がありますが、例えば季語に対して興味を持つと大変楽しいものに変化すると思います。俳句は国語の中でという固定観念を持つ方が多いのですが、季語には、動物、植物、時候、天文といった自然科学系や、地理、生活、行事といった社会科学系の要素を持つ季語など、すべての分野にわたつて、自然と触れ合い総合学習的な机上だけでない生の学習ができるのではないのでしょうか。音楽や、絵画とのコラボレーションを考へても、とても楽しく学べるはず。他のジャンルも含め、文芸が多くの若い方たちに継がれていくことを願つてやみません。

る、つまり伝達の一つの形式(手段)である。七五調によつて日本語は実に流麗になる。流れるようなリズムはからだにより深く浸透して、自分の思いが相手によく伝わる。

だが、短歌の働きは伝達だけではなく、もつと多くの意義をもっている。詠む者にとつて、短歌は日記であり、自分史でもある。古い歌を読むと、ああ、あの時はあんなことがあつたんだ、あんなことを考えていたんだと、自分の生活、その時の社会情勢、世界状況あらゆることまで思い返させてくれる。

また、短歌は心の救いにもなる。何か辛い時、腹が立った時、それを短歌に吐き出すことによつて、感情を和らげ、処理することが出来るのではないだろうか。その際上手下手など問題ではない。

短歌の種はどこにでもある。あなたのアンテナ次第。わかりきつたことであろうが、もう一度初心にもどつて見よう。

川柳の部

宮塚 肇

今回は、四十六名の方から応募をいただきありがとうございます。うございました。

「コロナ」や「マスク」のある句が激減し、また、前年に多くあった「ウクライナ」のある句がありませんでした。四年近く続いたコロナ禍が一段落した安堵感、決して見過ごせぬ戦争とはいえ遠く離れた地でのことというどこか醒めた気持ちの表れなのでしょう。一方、チャットGPTなどで話題に事欠かない「AI」のある句が散見されました。

二〇二三年は、「地球沸騰の時代が到来した」と、国連のグテレス事務総長が警告を発するほどの猛暑の年でした。以前、「子の電話クーラー入れる水を飲め」という自作を新聞に川柳として投稿しました。クーラー嫌いの妻を心配する息子からの電話があったのです。残念ながら採用されませんでした。ところが、ほぼ一か月後の同じ新聞の俳句投稿欄に「子の電話冷房入れる水飲めと」が掲載されていました。下五の表現に差があるだけで、ほぼ同一です。誰でも同じ思いであることを感じると同時に、文芸としての俳句と川柳との近さを感じさせられました。

五行歌の部

「見ること、感じること、思うこと」

鈴木 春野

第58集「五行歌の部」にご参加いただきましてありがとうございます。

五行歌の一番の特色は、「自分の思いや感じたことを自由に表現する」ということです。思いや感じ方はその人だけのもので個性が表れます。五行歌には先生はいません。添削もありません。毎月の歌会では作品一つずつに、20年続けている人も1年の人も全く平等に、合評し合って最後に作者の歌への思いを話してもらいます。合評や作者コメントをする場から話題が広がり、歌会はいつも和やかで、それぞれの人柄、個性も伝わってきます。

「今まで色々なサークルを経験して来たが、これほど長く続けているのは五行歌だけ」と仰る方が多く、その理由は「自由な意見交換が楽しく、一人一人の個性を大事にしてくれて、歌会での歌と人との出会いが楽しみ。また歌や話の中から教わる事があって有意義だから。」と語っていて、私も全く同じ思いで続けています。

以上のことから学んだのは、特に、メディアの場合、時事問題が句の内容の主体になりがちで、川柳と俳句とを別個の文芸として捉えるのはあまり意味がないのではということ。川柳では、森羅万象を自己の喜怒哀楽の感情や思いに沿って吐き、一方、俳句では季語・切れ字に留意して詠み、五七五の韻律を持たせ短詩にするということなのでしょう。

十月には、第三十六回となるふじさわ川柳大会を藤沢市・藤沢市教育委員会の後援の下、藤沢市みらい創造財団との共催で開催しました。参加者は、前年より大幅に増え、市内外から合わせて九十二名の盛況でした。コロナ禍を経て世の中が元に戻りつつあることを実感いたしました。

今回の応募者のほとんどの方は、市内のいずれかのサークルに所属しておられます。川柳に対する市民の関心・理解とその普及という願いを込めて、個人で活動されている愛好者からの応募を増やすことも今後の課題といえるでしょう。

「自分の知らない所でこんな楽しいことをしていたとは！ 今までのブランクがとても口惜しい。」と仰った20年以上前の新入会員さんの言葉は忘れられません。

どこの歌会に参加するのも自由ですから、その楽しさから3つ、4つ、それ以上と複数参加している方も多く、更に、遠方に引越されたりご体調具合で出席が無理になられた場合でも、紙上歌会形式や欠席歌での参加が可能な歌会もあり、多様に対応しています。

五行歌は生活の全てが題材になりますから、歌会では時々「こんなこと、あるある」とか「私もこれを歌にしたかった」と笑い合ったり学んでいます。要は、感じること、思うこと、で同じ物や事柄であっても見方が変われば思わぬ発見があり、人が違えばその差異は当然です。「人は考える葦である」という有名な言葉があります。人は目覚めている間は必ず何かしら考え、思い、感じているものです。それらをキャッチして自分の言葉とリズムで書き留め5行にすればもう五行歌です。難しく考える必要はありません。誰でも書けます。そんな意味から五行歌は、「心と頭の体操」になると私は思っています。

気軽に五行歌で遊び続けましょう。

現代詩の部

山田 美智子

「文芸ふじさわ」第五十八集を皆様のお手元にお届け致します。

令和五年は関東大震災から百年、東日本大震災から十二年という年でもありました。

地域防災、自主防災という防災意識の向上を目的に、自治体、学校、企業、施設等多くの団体による避難訓練はじめ各種の訓練が行われました。訓練に参加して思うのは、災害はいつ起きるか分ならず、日頃からの備えと地域の方々との交流を通して、お互いが知り合う事、そして共に助け合うことが大切だという事です。あたりまえの事です。昨今疎かにしていた事に気づかされます。令和六年一月の能登半島地震で被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げます。

居住地区で実施された訓練のひとつに、『救助犬訓練』がありました。救助犬協会からの参加で、災害救助犬として第一線で救助活動をされる隊員の方と救助犬の一心同体の様に見受けられる活動の一端を見学し、共助の重要性を学ばされました。救助犬とのふれあいコーナーもあり、心の癒やし（セラピー）としても活躍されているようです。

随筆の部

新田 愼 一

藤沢市の図書館に行くと、「文芸ふじさわ」が置かれた書架があります。図書館によって多少の差異はあるでしょうが、おそらく10冊くらい、年ごとの「集別」に配置されています。手に取ってご覧いただきたいと思えます。毎年応募されている方は、過去の自分の作品に出会うことができます。自身の心の遍歴に触れることができるのです。それらを比較して読むのもいいでしょう。これは大変ありがたいことです。きちっと保存してくれて、気が向けばいつでも閲覧できる、このシステムを大いに利用して自らの思いを書き続けてください。

さて今回の作品を拝見しますと

・作品数は37名で、ほぼ例年規模の応募となっております。いつものように、ほとんどの方が継続投稿者で、高齢者が多い、「また今年も元気で書いた」これは素晴らしいことで、ぜひ来年も書いてください。文章を書くことは脳の活性化を促し、いつまでも若々しくあることができます。

・若い方の応募者が少ないことを危惧しています。若い人が少ないと、将来の応募者が減ってゆくことを意味

ところで藤沢で有名な「小栗判官伝説」をご存知でしょうか。鎌倉大草紙に物語が遺されています。小栗判官物語は藤沢市以外にもあるようですが、遊行寺以外に西俣野には『伝承小栗塚』の石碑があります。現在は福祉施設が建っています。『小栗判官照手姫物語』は昭和四十九年発足の西俣野史跡保存会の方々により、伝承文化として継承されてきました。

十一月には藤沢市の指定文化財に『小栗判官』伝承に関わる資料等が指定された事は大きなトピックスです。地域の歴史を後世に繋げたいという思いは大変貴重です。

文芸を志す皆様にとりましても大きな財産にもなりましょう。

コロナ禍の後、私たちはあたりまえの暮らしがいかに大切か、身をもって学びました。家庭や地域、コミュニティの形成された社会の中で、何が大切なのかをあらためて気づかされました。未来を見据えた時、過去がどうであったかを振り返り、考える力を互いに備え、次の一歩とすべきなのでしょう。

最後に「文芸ふじさわ」第四十八集の同人作品『一本松とヴァイオリン』の鎮魂と未来へ込められた祈りを思い返しています。

します。みなさんのまわりにいる方に、書くことをぜひおすすめしてください。若い方はSMSやSNSなどに慣れて短い文章は得意ですが、少し長い文を避ける傾向にあります。若い人たちに書く楽しさを知っていただき、いろんな人々の文章が混じりあった楽しい冊子にしたいものです。

・原稿用紙に手書きで投稿される場合、誤字脱字が増える傾向にあります。これはある程度やむを得ないことであります。パソコンで打ち込むと漢字を自動的に識別し、正しく打ち出してくれるからです。これを防ぐには、書き終えた原稿を読み返すことが大切です。読み返していると、なんとなくこの字は変だなと気づくことがあります。その場合間違いがあることがあります。

・音読することも大切です。音読することで文章のリズムが良いか悪いか気づくことができます。句読点の大切さが分かってきます。起承転結があつてリズムのある文章は、読む人をいい気分にくれくれます。日本語は、七五調と言って行進曲のような調子で進むことのできる力もついています。

・なるべく文章になれるため、日記を付けるのも一つの方法です。毎日あったことや感じたことなど、これも効果のある頭の体操になります。

【短歌】

団体名	代表者名	会員数	集会日	場所
新青虹藤沢短歌会	久保井 収	12人	毎月第3日曜日	辻堂公民館 辻堂市民図書館
花舟短歌会	原 けい子	30人	毎月第1火曜日 毎月第2・第4水曜日	善行公民館 明治公民館
なぎさ短歌会	加藤 和彦	11人	毎月第3火曜日	湘南なぎさ荘

【川柳】

団体名	代表者名	会員数	集会日	場所
六会川柳会	小野 敬子	11人	毎月第2・第4火曜日	六会公民館
なぎさ川柳会	深野いく生	7人	毎月第2・第4水曜日	湘南なぎさ荘
鶴沼川柳同好会	宮塚 肇	8人	毎月第2・第4土曜日	鶴沼公民館
辻堂川柳会	大久保近下	13人	毎月第3土曜日	辻堂公民館
湘南台川柳会	熊田 松雄	28人	毎月第4金曜日	湘南台公民館
生きがい川柳同好会	森本 生雄	7人	隔月1回・不定期	生きがい 就労センター
川柳こぶしの会	松下 協一	11人	第3木曜日	こぶし荘

★サークル紹介★

(2023年11月現在)

【俳句】

団体名	代表者名	会員数	集会日	場所
一葦湘南句会	松井 恭子	30人	毎月第1土曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
一葦藤沢句会	中根 美保	24人	毎月第2火曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
くくだち句会	原山テイ子	13人	毎月第3木曜日	湘南台図書館
湘南山の手句会	鈴木 哲也	11人	毎月第2水曜日	済美館
湘南若葉会	笠原与志生	22	毎月第3金曜日	藤沢市図書館
鷹辻堂俳句会	堀口みゆき	-	毎月第2・第3木曜日	吟行(第2木曜)/辻堂 市民図書館(第3木曜)
たけのこ会	永井かほる	13人	毎月第2木曜日	村岡公民館
天為湘南俳句会	内藤 繁	70人	毎月第3日曜日	藤沢市民会館他
俳句季の会	千葉 民子	11人	毎月第4火曜日	藤沢公民館
渚 会	小泉 恭子	16人	毎月第1金曜日	辻堂公民館
波藤沢例会	山田 貴世	35人	毎月第4水曜日	藤沢市役所 市民利用会議室
はこべ俳句会	加藤 静子	12人	毎月第3木曜日	鶴沼公民館
柊 俳句会	西野 洋司	16人	毎月第4水曜日	鶴沼公民館
冬すみれ会	鈴木 絹子	8人	毎月第1日曜日	済美館
むかご会	石垣みち代	17人	毎月第1・第3水曜日	済美館
無名の会	高野 尚志	15人	毎月第2日曜日	吟 行
サンシャイン句会	堀口みゆき	-	毎月第1金曜日	藤沢市民 活動センター
はまべ句会	堀口みゆき	-	毎月第4日曜日	辻堂市民図書館
みちくさ俳句会	大山 賢一	10人	毎月第4水曜日	藤沢公民館

【五行歌】

団体名	代表者名	会員数	集会日	場所
藤沢日曜歌会	橋本 圭子	21人	毎月第1日曜日	藤沢市民会館
藤沢火曜歌会	西田 明子	12人	毎月第3火曜日	藤沢市民会館

～ ご協賛ありがとうございます ～

文芸ふじさわは、市民文芸の活動を盛り上げるため、長年にわたり発行しております。

文芸ふじさわ第58集発行にあたり、市内の団体・法人の皆様、個人の皆様からご協賛を賜りました。

皆様からの温かいご支援に心よりお礼を申し上げますとともに、今後とも本事業へ変わらぬご理解とご協力をよろしくお願ひ申し上げます。

【随筆】

団体名	代表者名	会員数	集会日	場所
てっせん	神部ゆかり	6人	毎月第2木曜日	明治公民館
文芸光風	能勢 健生	9人	毎月第1・第3火曜日	湘南大庭図書館
エッセイなぎさ会	落合小一郎	10人	毎月第1・第3水曜日	湘南なぎさ荘

団体・法人ご協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

有限会社 アート稲元
 合資会社 関水スポーツ
 有限会社 豊元書店
 波 俳 句 会
 有限会社 ユザワ文具

個人協賛ご芳名 (敬称略 五十音順)

青木 敏行 小池 貴瓊子 長谷川 恒信
 鮎澤 永二 小山 美穂 松下 協一
 井口 鐵介 塩崎 麗子 三浦 節子
 今井 美恵子 角 和富 柳 蒼柳
 大澤 清水 チズコ・W・クジラ やまぐち 珠美
 垣田 文子 富安 千鶴子 山下 巖
 神谷 章夫 西野 洋司 他20名

第58集編集委員

俳句 堀口みゆき
中根美保
短歌 原けい子
川柳 宮塚肇
五行歌 鈴木春野
現代詩 山田美智子
随筆 新田愼二

文芸ふじさわ 第58集

発行 藤沢市教育委員会
(公財)藤沢市みらい創造財団
問合せ (公財)藤沢市みらい創造財団
芸術文化事業課
藤沢市鶴沼東8-1(藤沢市民会館内)
TEL 0466-28-1135
FAX 0466-25-1525
編集 文芸ふじさわ編集委員会
発行日 2024年(令和6年)3月31日
印刷所 (有)アート稲元

「無断転載を禁じます」